

はしがき及び凡例

本書は小山田与清著『松屋外集』のうち、初編二〇巻、二編七巻からなる系統の伝本を翻刻、校合して研究者・江湖好学の志に提供するものであり、巻一に続いて巻二を刊行する運びとなった。また、訓点や捨て仮名なども完全には一致せず、伝本研究の進展を今後に期すこととしたい。この翻刻では国会図書館本を底本として、もりおか歴史文化館本(1499)を対校本文として採用した。もりおか歴史文化館本には南部家旧蔵の『松屋外集』が他に写本二部、刊本一部が存在している。底本、対校本文については巻一のはしがきで示した程度のことしかまだ分かっていないが、小さくない異同をもつ項目もある。

翻刻の凡例を説明する。まず冒頭に私に内題と目次を示した。目次は項目番号と頁数で示した。内容は次頁以降の本文中の目次を参照されたい。翻刻は国立国会図書館本の本文に従い、字取り、返り点、捨て仮名字も忠実に翻刻するようにつとめた。割書については原則へに本行と同じ文字サイズで示し、割書内の返り点も翻刻した。字形が不明瞭な字やUnicodeで定義のない字形、使用フォント(DrAnti明朝)に割当がない字については通行字体を利用した。行頭の筆の尻による圏点は「○」。和歌に付された庵点は「へ」、踊り字については字形を参照して「ゝ」「々」を、改丁については表裏ともに『』を付した。丁数は墨附丁数と表裏の別を漢数字で示した。校合に際しては本文異同が認められる場合に異同を示し、アラビア数字の文末脚注を付す形で位置を示した。捨て仮名・返り点の異同も大きいが無視した。

対校においては、もりおか歴史文化館本(1499)を「も」として、かぎかっこ内に直前の文字との異同を示し、対校本文にその文字がない場合は「ナシ」と記し、底本にない文章が挿入されている場合には(追加)を末尾の線以降を校勘記として付している。長文の入れ替えが生じる場合には底本の本文と「Ⅱ」で対校本文の入れ替えを示したが、巻二にはそういう事例はないようだ。対校本文の提示は底本

と同じ基準で示したが、改訂については省略した。国立国会図書館本に見られる朱点などについても脚注で示した場合がある。南朝系図はいずれの伝本も朱で単線が引かれるが、印刷の都合で墨線とした。また、系図を完全に再現することは難しいので、親子関係が分かるように若干字取りを変更している。なお組版における問題により、一部返り点やカーニングに位置ずれがある他、準假名が底本と変わっている。たとえば振り仮名中の「ㄱ」などの略字は「コト」で開くようにした。捨て仮名に使われる「也」はなるべく漢字で再現した。一部は漢字で示さざるを得ない箇所もあった。附属のCDには本文データ及びフィールドコードを除いたテキストデータをも付した。巻一とは行詰め字詰めが異なることを含め、丁数表記を漢数字に変更するなど体裁が異なる点もあるほかいくつか変更がある。ご寛恕を願う次第である。書名や人名の検索には便利かと思う。翻刻の許可を頂戴したもりおか歴史文化館に深く御礼申し上げる。なお、本書はJSPS科研費JP22K13040、JP21J00181の成果である。

令和六年三月十一日 梅田径 記

翻刻
松屋外集
卷二

目次

目錄 1頁

第十六	第十五	第十四	第十三	第十二	第十一	第十	第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一
6 2 頁	5 6 頁	4 9 頁	4 1 頁	2 5 頁	2 0 頁	1 9 頁	1 3 頁	1 2 頁	1 1 頁	1 0 頁	8 頁	8 頁	6 頁	6 頁	3 頁

校勘記	第三十	第廿九	第廿八	第廿七	第廿六	第廿五	第廿四	第廿三	第廿二	第廿一	第二十	第十九	第十八	第十七
9 3 頁	9 2 頁	8 8 頁	8 5 頁	8 4 頁	8 3 頁	8 3 頁	8 2 頁	8 2 頁	8 1 頁	7 9 頁	7 4 頁	6 9 頁	6 9 頁	6 4 頁

松屋外集 二 (外題)

(一丁空白)

松屋外集卷之二

目録

第一 おほよそ衣

いざとほし ゆきのよろしも 肩ぬぎ

第二 しらさ雲

小雲

第三 よろこぶ雲

慶雲 喜雲

第四 むのこ雲

第五 みづまさ雲「一才

黒雲 魚鱗雲

第六 鶺鴒の鏡

第七 梁塵

第八 白木綿シラユフ幣ミテクラ

木綿ユフ麻アサ栲タク四手シデカタソギ
千木氷木チキヒキ荒妙アラタヘ和妙ニキタヘ玉串タマクシ

第九 強盜熊坂長範

第十 鄧曲エイキョクヒトヨ一節切尺キリシヤクハチユウケイ八中啓

第十一 經房遺書考

第十二答荒木田久守南朝系圖「一ウ

津嶋天王社^一

第十三宰相大將

参議 非参議 八座^{ヤク} やくらの司

もろゆき

第十四いわちどり

いわけ いわけなき つゞは小^{チヒサ}きをいふ

長^{ナガ}渚^ノの濱 名^ナ草^{クサ}の濱 千鳥

第十五^{トウ}嶮^{キマ}摩^マ知

尔^ニの意^イの乎^ヲ 与^ヨの心^{シン}の乎^ヲ

大坂山口 がてんかも 當^{ガイ}麻^マ「二オ

第十六さいで

しまく入道

第十七うらわかみ

第十八答屋代弘賢之問

おほあらしき おほあらしきの里 おほあらしきの杜

大荒木の駒 夜半^{ヨハ} ふし原 ふしづけ

しば原 とわたる けこのみわもり

第十九答磐瀬醒之問

足袋 皮足袋^{カハダビ} 木綿足袋^{モメン} 絹足袋^{キヌ}

金抄^{キンショウ}の誓言^{セイヤゴン} 馬鹿者^{バカモノ} 天守 繪馬^{エウマ}「二ウ

六十六部回國の経聖 木から落た猿

第二十答椿仲輔問

比滿沙伎理築 ヒマサキリノヤナ えりさす 都婆波 ツバハ

山都婆波 ヤマツバハ 小都婆波 コツバハ 等呂須伎 トロボスギ

下総豊田郡

第廿一くがにあがれる魚

第廿二歌道の養子

第廿三つくり丘

第廿四野井

第廿五哉の字「三才

第廿六壽の假名

第廿七等身の佛

第廿八更級日記

第廿九雞頭花 ケイトウ

矮雞冠 ナシケンケイトウ 雞冠菜 トサカノリ

第三十いししく

(四行空白)「三ウ

松屋外集卷之二

武蔵多西

平小山田與清

越後高關

平澁谷永田保

稿訂

第一おほよそ衣

○古語拾遺に仍就^ニ於^テ倭^ノ笠縫^ノ邑^ニ殊立^ニ磯城^ノ神籬^ニ奉^リ遷^ス

天照大神及草薙^ノ劍^ヲ令^テ皇女豐鍬入姫^ニ命^ヲ奉^リ齋^ス焉^ヲ其^ノ

遷祭^ス之^ハ夕^ニ宮人皆參^リ終夜宴^ス樂^シ歌^ハ日美夜比登能^ル於^テ

保與須我良^ル伊佐登保志^ト由岐能與呂志母^ト於^テ保

與須我良^ル自注^シに今^ノ俗歌^ト日美夜比止^ト乃^ハ於^テ保與

曾許呂茂^ト比佐止^ト保志^ト由伎^ト乃^ハ與呂志茂^ト於^テ保與^ト曾^ト四才

許呂茂^ト詞^ト之^ハ轉^ス也^ト按^テ二美夜比止^ト乃^ハ宮人之^ト於^テ

保與須我良^ルハ大夜過^ス乍^ニ也^ト大ハ宴^ス樂^シ之夜^ト

盛事^トをほめて大夜^トといふ豊樂^ノの豊^トにおなし伊

佐登保志^トは率^ト通^ス也^ト率^トを伊佐^トとのみいへるは伊

豫^トの伊佐庭^トなどの例^トとおほかり通^スは徹^ト夜^トの

意^トにて夜^ト一夜寐^スすしてうたけし徹^トす也^ト俗^トに夜

通^スし立通^スし起^スとほしなといふもおなし萬葉集

へ十^ノ卷^ノに居明^シ今宵^ハ飲^ムんとよめるもまた徹^ト夜^ト

乃義也^ト由伎能^ト與呂志母^トは行^ノの宜母^トにも母^トは助

辞也^ト行^ハは常夜行^ト來^リ經^ル行^トなどの行^トにおなしくて^ト四ウ

時刻^ノの移^ルるをいふ神樂歌^ニに鷄^ハ鳴^クとも歌遊^ビて

ゆかんなどいへる行^トもおなし宮人^カ大終夜^ニに

率^ト起居^シて宴樂^スし時刻^ノの移^ル行^トかおもしろくよろ

しきとなり此哥^ノの解^ヲを神樂哥^ノの注古語拾遺^ノの

注^トなどにおろくいへるはいとまさしき考^トとも

にて取用るに足す又俗歌といへる方の於保与
曾許呂茂は大装衣比佐止保志は膝通にて欄著
衣は膝の下に裔いと長ければなりと賀茂翁の
いはれし説よろし由伎能与呂志茂はその衣を
着て行貌のよろしきといへるを由を誤として」五才
神樂に支乃与呂之毛与と改たるに据て著の宜
きなりと賀茂翁いはれたれと古語拾遺の諸本
いつれも由の字なれば舊に従ひて妄に改むへ
からず神樂哥の方にては着の宜母と心得るか
よし大几衣雪の宜もなといふ説はいとうけか
たし夫木抄へ冬部三に天仁二年十一月家歌合神樂
藤原盛仲へ宮人は神のいさむるうれたさにおほ
よそ衣ぬきそみたる、此歌の心は神の禁制む
る慨さに大装衣をぬきみたるといひて肩を脱
乱舞貌を神の禁にてすきかましきわさせられ」五ウ
ねは心の乱たるによせていへる也宮人は舞人
也千五百番歌合嘉陽門院越前か哥に紳とると
よ宮人の神あそひともよめり神のいさむるう
れたさは神の制止給ふかうれはしきと也伊勢
物語に恋しくはきてもみよかしちはやふる神
のいさむる道ならなくといふとうらうへ也

ぬきそみたるゝは舞人の肩カタを脱ヌキみたるゝことに
て五節ゴセチの肩脱カタヌキなどいふこともあり夫木抄へ冬三に三
嶋社に奉りける神樂をしらていふ哥宮人権僧
正公朝 霜のうへに雪をかさねて宮人のおほ 六才
よそ衣オホヨコさえあかしつゝ此哥の心は宮人の大装
衣コロモの霜雪にさゆるよし也さと宮人振といふ名
はやく古事記允恭の段にも見えたりき

第二しらす雲

○夫木抄へ雑一 或抄古哥しらすくもよみ人しらす
天のはらよききりわたるしらす雲月にもまか
ふはやくけねかし此しらす雲ものをさく見
えず此哥の心によれば白小雲シラツクモの心ココロにや月の夜
ちぎれたるしらす雲のあるか月にもさはりてま
かはずへければはやく消キユよとよめるなるへし 六ウ
小を佐サといふは三樹考に例を挙たれば闕ミて知
へし小雲の字も詩薈ケ兮蔚ウ兮の箋に薈蔚之小雲
不レ能レ為二大雨一と見ゆ

第三よろこぶ雲

○千五百番歌合に土御門内大臣へもろ人のあふく
のみかは君か代は空によろこぶくもゝありけ
り此哥夫木抄へ雑一にも載たり按によろこぶ雲は

慶雲也卿雲慶雲など相通はして書けり續日本

紀へ三の卷へ類聚國史へ百六十五の卷へなどにみえ延喜治部式

大瑞の条に慶雲状若^{ニシテ}烟非^ス烟若^{ニシテ}雲非^ス雲と注され七才

たり史記天官書に若^{ニシテ}煙非^ス煙若^{ニシテ}雲非^ス雲郁々紗々^{トシテ}

蕭索綸困是謂^フ卿雲ト々見^ル喜氣也注に正義曰卿

音慶云々漢書天文志の説亦おなし同書礼樂志

に甘露降慶雲出云々晋書天文志中に瑞氣一日

慶雲若^レ煙非^レ烟若^レ雲非^レ雲郁々紛々蕭索綸困是謂^ニ

慶雲亦曰景雲此喜氣太平之應云々などもあり

源氏藤裏葉の卷の河海抄咲花抄提要目安湖月

抄如菴説などに紫雲を慶雲なりともいへり韻

府に鷗陽詹德勝序を引て膳歡心揚喜雲見え

たる喜雲もよろこぶくもと訓へし藝文類聚へ一の七ウ

卷天部へ雲の条に孫子瑞應圖曰景雲太平之應也

曰非^レ氣非^レ煙五色紛縵謂^ニ之慶雲云々同書へ九十八の卷祥

瑞部上へ慶雲の条にも挙て紛縵を氣氤に作る又景

雲卿雲などの故事をも載す武備志へ百六十一の卷占度載

占雲氣の篇に瑞氣三曰慶雲若^レ烟非^レ烟如^レ雲非^レ

雲郁々紛々蕭索綸困是謂^ニ慶雲亦曰景氣此喜氣也

也太平應云々管窺輯要へ五十六の卷へ瑞氣の条に曰

慶雲一曰輕雲若^レ烟非^レ烟若^レ雲非^レ雲郁々紛々蕭索

輪困是日慶雲二曰景雲一此喜氣也太平之應一曰昌光赤如三戟狀聖人起而受命則見云々なども見八才ゆ此外挙にいとまなし

第四ゐのこ雲

○夫木抄へ雑一源仲正家集ゐのこ雲の哥に雲はらふ月の光におひにけりはしりちりぬるゐのこ雲

かなこは鶴林玉露へ十五の卷范石湖占雨詩に飛雲走

群羊停雲浴三豨云々武備志へ百六十一の卷占雲氣一氣之戰

陣の条に軍行有白雲如猪来臨者大驚宜備云々

またへ百六十二の卷占氣雲氣二氣之軍敗の条に軍上氣中有黒

雲一如羊形或如猪形者此尾解之氣軍必敗云々また

軍上氣如群羊群猪在氣中此衰氣擊之必勝云々八ウ

管窺輯要へ五十三の卷雲氣不祥占に白雲如猪所當軍

夜須警備軍驚之兆云々またへ五十四の卷將軍氣の条

に或如群猪在霧氣中皆衰氣云々またへ五十五の卷

如群猪在於氣中為敗軍云々晋書へ天文志中へに黒氣如

壞山墜軍上者名曰營頭氣或如群羊群猪在氣中

此衰氣也云々など猪雲の名からくにもきこ

えたれは本朝にもさる名ありしなるへし

第五みつまさ雲

○慈鎮和尚の拾玉集へ四の卷へ百首歌の中にへすゑはれ

ぬ水まさ雲にもる月を空しく雨のよはやおも」九才
はん此哥夫木抄へ雑一にも水まさ雲と題して収た
り写本には水まさ雲ともあれと藻汐草にもみ

つまさ雲とあれは多本に従へしこは水増雲の

義なるへし為尹百首に夕立早過へ夕立の水まさ

雲のはや過て涼しくうかふみかの月かけ一本

には水ます雲ともあり周礼へ廿六の卷宗伯礼官之職へ保章氏

以三五雲之物一辨一吉凶水旱降農流之禘家云注に

鄭司豊公雲色黒為水云へ升菴外集へ二の卷へ望氣經

の条に黒雲多水云々晋書へ元文志中へに雲甚潤而厚大

雨必暴至四始之日有黒雲氣如陣厚大重者多雨一九ウ

云へ古徴書へ十の卷へ春秋感精符に冬至日見黒雲一有

水云へ武備志へ百六十一の卷占雲氣一氣之戰陣の条に凡安

營有黒雲如鳴鷄狀一与營門相對一宜移營高阜一

大雨河水泛漲防有沈溺之患云へ管窺輯要へ卅六の卷壁宿

雲氣干犯占に黒氣入壁有破國凶一曰有大水云

云など見え同書へ五十四の卷へ風雨の条萬用正宗へ一の卷へ

天文門などにも黒雲必雨よしありこれを水増

雲といふへし本間游清日豊前小倉の藩士秋山

光彪語けるはこの大江戸にて鱗雲といひて魚

鱗の形せる雲をわがすむあたりにては水まさ」一〇才

雲といへりと語れり又仲田顯忠ぬし語られし
は先年江島へ行とて程谷驛に宿かりし時宵は
雨ふりて暁方に雲間の月ほのかに出たりこゝ
にあひやとりせる飛脚の有けるが壁をへたて
て人に物いふを聞は今宵は水まさ雲にて月が
明らかならぬといへり立のいそぎに其飛脚は
いづこの人とも問正さず水まさ雲の義をもた
つねもらして今に口をしといへり今其夜のさ
まを思ひやるに慈鎮和尚の水まさ雲にもる月
をとよみ給へるによくかなへるやう又此兩人「一〇ウ
の話をもて考ふれば水まさ雲といへる名今世
もかた／＼に有とみえたり猶俟ニ後考「云々按に淮
南子覽冥訓水雲魚鱗とあるは此いわし雲の説
にかなへり

第六鵲の鏡

○夫木抄〈夏三〉文永十年毎月一首中民部卿為家へか
さゝきの鏡の山の夏の月さし出るよりかけも
くもらす同書〈秋四〉家集月歌中為家卿へ天のはら
ひかけさしそふ鵲のかゝみとみるは秋のよの
月同書〈雑二〉御集慈鎮和尚へかさゝきの鏡の山の「一一才
夏の月さし出るよりかけもくもらす按に此哥

新拾遺（秋下）にも家十五首哥に月前大納言為家と

て載たれば慈鎮和尚の哥とせるは誤也鵲の鏡

は月の異名也唐李嶠か月詩に桂生三五夕莫開

二八時分輝度鵲鏡流彩入蛾眉云々王維か清如

玉壺水詩に曉浚飛鵲鏡宵映聚螢書云々李白詩

に明々金鵲鏡了々玉臺前云々王勃上皇甫常伯

啓に鸞鑣就路駕駿相懸鵲鏡臨春妍嬾自遠云々

など見えたるにて知へし

第七梁塵 一一ウ

○次郎百首笛藤原仲實吹たつる笛のしらへの

聲きけはのとけきちりもあらしとそおもふ此

哥夫木抄（雑十四笛部）にも載たり土左日記に又ある

人にしくになれとかひうたなどうたふかくう

たふにふなやかたのちりもちりそらくゆく雲も

たよひぬとそいふなる云々列子湯問篇に薛譚

學謳於秦青未窮青之技自謂盡之遂辭歸秦青

弗止餞於郊衢一撫一節悲歌聲振林木響遏行雲薛譚

乃謝求反終身不敢言歸秦青顧謂其友曰昔韓娥

東之齊匱糧過雍門鬻歌假食既去而餘音遶梁欐

三日不絕左右以其人弗去過逆旅人辱之韓

娥因曼聲哀哭一里老幼悲愁垂涕相對三日不食

遷^{ニハカニ}而^レ追^レ之^ヲ娥^ヲ還^テ復^タ為^ニ曼^ニ聲^ニ長^ニ歌^ス一^{ヒトサト}里^ノ老^シ幼^シ喜^ビ躍^シ拊^シ舞^シ

弗^レ能^ハ自^レ禁^ム忘^ル向^テ之^ノ悲^ヲ也^ニ乃^チ厚^ク賂^フ發^シ之^ノ故^ヲ雍^ノ門^ノ人^ノ至^マ

今^ニ善^ク歌^ハ哭^ハ效^ス娥^ノ之^ノ遺^シ聲^ニ云^フ此^ハ說^ハ博^ク物^ノ志^ハ八^ノ卷^ノ史^ニ補^フ

篇^ニも出^テ餘^リ音^ヲ遶^リ梁^ノ欂^ノ三^日不^レ絶^スの欂^ノ字^{ナシ}梁

欂はうつはり也劉子精神篇注に韓娥善歌欲^ニ入^ル

齊^ノ唱^ノ歌^ノ行^キ至^リ雍^ノ門^ニ值^フ雨^ニ雪^ニ糧^盡欲^ス歌^フ乞^フ食^ヲ雍^ノ門^ノ人^ノ不^レ

識^レ以^テ杖^ヲ擊^ツ之^ヲ韓^ノ娥^ノ遂^ニ悲^シ哭^ス雍^ノ門^ノ人^ノ聞^ク其^ノ哭^ノ聲^一皆^レ悲^泣

三^日為^レ之^ノ不^レ食^ス有^リ智^者謂^フ娥^ノ日^子既^レ善^ク歌^シ可^シ停^レ哭^テ而^{シテ}一^ニ二^ウ

歌^ニ韓^ノ娥^ノ即^チ唱^ス其^ノ歌^ヲ清^ク暢^ク可^レ動^ス梁^ノ塵^ヲ雍^ノ門^ノ人^ノ聞^ク之^ヲ又

三^日忌^ム其^ノ食^ス也^ニ云^フ藝^文類^聚四^十三^樂部^三歌^部に劉^向

別^録曰^ク有^リ麗^人歌^ヲ賦^ヲ漢^興以^テ來^ニ善^キ雅^歌者^魯人^虞公^也

發^シ聲^ヲ清^ク哀^ク蓋^シ動^ス梁^ノ塵^ヲ云^フ同^ク四^十四^卷樂^部四^箏部^梁簡^文

帝^ノ箏^賦に使^ム長^廊之^瓦虛^梁上^ノ之^塵染^キ衣^ニ云^フ杜

氏^ノ通^典八^百四^卷樂^五歌^ノ條^に有^リ漢^ノ有^リ虞^公善^ク歌^シ令^シ梁^上之^塵

起^ル上^ニ云^フと見えし梁塵も共に餘音達^ル梁^上に

起^ル語^也本^朝の古^書に梁塵秘抄^{梁塵秘抄}口

傳^集梁塵愚^按抄^なと名^つけ古^文におほく韓^城¹⁰

之^塵と書^ルものみなこれを据^ヒとす^一一^三才

第八^白木^綿幣^四手^カタソ^ギ

○木^綿ハ穀^木ノ皮^ヲ剥^テ晒^シタル^ヲ云^フ穀^木ハ紙

ニスクカウゾト云^フ也^ニ梶^葉ノ紋^ナドモ此^ノ木^ノ葉

ノ形ヲ取レル也其色白キユエ白木綿ト云此ヲ
 布ニ織ハ最柔ナルユエ柔抄ト云ニキハ柔ナル
 事タヘハ約テテトモイフサイデナト云モ裂布
 ニテ細ニ裂タル布也キヲイト云ハ音便也然レ
 バニギテト云ハ柔妙ノ約談白ニギテト云ハ白
 木綿モテ織タル柔布ト云フ事也此ヲ神衣ノ料ニ
 奉リ又白木綿ノマヽニテモ奉ル也又サト云モ一三ウ
 此妙ヲ細ニ切テ神ニ奉ルハコロモヲ手向ル義ニト
 レル也又サハ禱麻也ネギヲ約テヌト云ヒフサ
 ヲ省テサト云古語拾遺ニ麻謂之総ト見ユ神ニ
 請禱トテ奉ル麻ノ心也其衣ハ木綿ニテモ麻ニ
 テモ織レバ通ハシテイヘル也又青和手トハ麻
 ハ木綿ヨリモ色劣リテ青ケレバ麻モテ織タル
 柔布ヲ云也柔妙ニムカヘテ荒妙ト云ハ荒ク織
 タル布也ユフト云名ハ物ヲ結モノナレバ也又
 タクト云栲繩栲綱ナドモ云ハ手繰義也麻ニモ
 木綿ニモ涉リタル總名也後世ハタグルト濁テ一四才
 イヘド古ハ清テタクルト云ル也

○弊ハ滿座ニテ座上ニ充滿セシメテ奉ル義坎又
 ハ手ニ持テ座ニ備ル義ニテ御手座物坎又ハ手
 向座ニテ御手向座物ノ義坎トマレカクマレ座

上ニ滿備ヘテ奉ル物也座トハスベテ物ヲ置ク
処ヲ云倉モ物ヲ置ク家也馬鞍ハ人ヲ乗セオク
処也位ハ人ノ就テ居ル処也サレバミテグラノ
クラハ物ヲ滿テ置ク処ニテ臺ナドヲ云ベシ後
ニ幣束ヲミテグラト云ハ上古榭ニ木綿ヤ玉ヤ
鏡ヤクサノ物ヲ付テ手向種ニセシヨマネテ「一四ウ
紙ニテ作り轉リテハ金銀、幣ナド云モ出来タル
也太玉串ト云ハ太ハホメタル詞タマクシハ玉
ヲツケタル串坎又ハ手向種¹³手向串坎此モ臺ニ
充テ奉ル由ニテミテグラトハ書ル也

○木綿四手ハ木綿ハ前ニイヘル如ク穀木ノ皮ヲ
剥テ晒シタルニテ今ノ苧ヨリモ色白キ物也四
手ハ下垂シヅタレノツヲ省キタレヲ約テテト
云シタリ柳シダリ尾ナドノシダリモ下垂也下
ヲシヅト云ハ下枝下情ナト例多シ又省テシト
ノミ云ハ高倉下ヲカクラジト云類也上古榭「一五オ
ニ木綿玉鏡ナド付テ弊ニセシヨリ神ニ木綿付
タル榭ヲ太玉串トテ奉リ後ニハ木綿ヲ紙ニカ
ヘテ榭ニ付ケ或ハ榭ナラヌ竹ナドニ挟テ木綿
四手トモ幣束トモ云フ事トナリヌ又左繩ナドニ
付ル紙モ木綿ヨリ思ヨリタルニテ木綿下垂ノ

義ナリ

○カタソギハ宮柱ノ屋根ノ千木ノ片方殺タルヲ云、千木亦ハ氷木トモ云リ、肱ノ如ク組合セタル木ナレバ、肱木ナルヲ上ヲ省テハ千木下ヲ省テハ氷木ト云也、カヤ葺ノ屋根ノ押ヘニ前後ノ軒ノ端ヨリ頂上マデ木ヲ二本ヤリチガヘタル末ノ長ク出タルサマヲ千木高領ナド云、モ千木高ク、頭レタル家ニソコヲ領シ住義也、片ソギノ行合ヌト歌ニヨメルモ木ヲヤリ違ヘシ上ノ前後ヨリ行合処ヲ云、又風雅集二度會朝棟カタソギノ千木ハ内外ニカハレドモチカヒハ同ジ伊勢ノ神風トヨメルハ内宮ニハ内ヲソギ外宮ニハ外ヲソグト云、後ノ定アルニ据レル也

以上略考四箇條所答平戸城主松浦¹⁴源濶朝臣之問也」一六才

第九強盜熊坂長範

○強盜熊坂長範といふもの美濃國赤坂の宿にて夜討し牛若丸に討たれし事は烏帽子折、謡曲熊坂謡曲などに見えたれどもと作り物語なれば信用べくもあらず此は義経記に陸奥の金商吉次牛若をぐしてくだりけるに近江國鏡宿にやど

れる夜強盜仙道の大将出羽國人由利太郎越後
国頸城郡人藤澤入道信濃人さんの権頭の子息
さんの太郎八代のごんの守遠江人蒲与一駿河
人奥津十郎上野人とよ岡源八など夜討してみ
なうたれ中にも藤澤入道大長刀にて戦しが遂
に牛若に討れしよし見ゆこれを翁の烏帽子折
草子に美濃國青墓宿にて熊坂のちやうはんと
いふもの、夜討せしよしに引直して作りたる
を謡曲はそれによりて又作りなほしたるもの
也されば熊坂長範は義経記の藤澤入道が事な
るを雑々拾遺に賀州熊坂太郎長範といふは藤
原氏なり武勇たくましが後に盜賊の頭
となり近江の国鏡又は美濃路へ立こえ往来の
旅人をはぎとり世を渡るよししるせしはいみ
じき妄説也謡曲拾葉抄に異本義経といふもの
を引て熊坂張樊といふ盜は加賀国熊坂人なる
が美濃国赤坂宿にて夜討し牛若丸に討れしよ
し記せるもいとくうけがたし又張良の張の字
と樊噲の樊の字をとりて智勇を表したる名と
いへるもしひごと也烏帽子折草子にくまさかの
ちやうはんおやこ六人とも見え七歳のとしは

一七オ

じめて馬を盗みそれより強盜の大將軍となり
五人の子ども、各ぬす人のわざにかしこくて
世に横行せしよしなどあれば六十ばかりの翁
なりけんことおしはかられ烏帽子折、謡曲に六
十三といへるもさもとおもはるゝ也然て長範
が年齢形粧などは義経記の藤澤入道がさまと
烏帽子折、草子烏帽子折、謡曲熊坂、謡曲など考て
押量べし○又按陸奥人熊坂邦子彦が文章諸論
に熊坂四郎長範の事を記して信州の名族とし
保元の役に左馬頭義朝に従て白川殿を攻奉り
しものとす又平氏の粟を食を恥て剽掠を業と
せしを伯夷叔齊が節に比したるなどみなしひ
て己か先祖とし其名をかゝやかさんための文」一八才
飾也家系譜牒は私の説を主張せるもあれば従
ひ用ひがたきはた少からず熊坂長範に子孫あ
りといふ事もいかゞあらん熊坂は地名にて相
模、國愛甲郡にも熊坂村あり又平家物語七の卷
北國下向の条に信濃と越後の境なる熊坂山に
陣をとると見え盛衰記、廿八の卷北國所々、合戦
の条同州の卷平氏侍共亡条などに熊坂とある
も同處ときこゆこはもと山の隈の坂の事にて

それに起れる名なればさる地名諸国におほかるべくそこに住たる人熊坂を称号とせしもあ一八ウ
またなるべければ熊坂氏必長範が子孫といはむもいかゞ也烏帽子折草子に据れば父子六人ことぐく討れたれば子孫なしといはんかたまさるべし又義朝に従て白河殿を攻奉りし熊坂四郎は名乗も傳はらねば長範也といふ證もなしされば金商吉次をおひやかせしといふ熊坂長範は作り名にて藤澤入道が前名なること義経記烏帽子折草子を考合せて知べし長範が事蹟實録にはたえて見えざるを強てありし人とせんはいかにそや續本朝通鑑六十二の卷にも俗一十九才説義経殺強盜熊坂長般及其徒数人於赤坂蓋与由利藤澤之事相謬傳者乎といへり緒論に邦乘を閲し野史氏を考といへるは俗書に己が闡推の説をくはへてかく古書に見えたり顔に書出しなるべしそは文辞のみを崇びて皇國の事實を疎におもふものおほかれは也藤澤入道を熊坂長範と改めしは當時藤澤氏にはゞかる人なとありてのわさにやさて牛若金商吉次末春に具して東國に下れるよしは平治物語三の卷盛

衰記四十六の卷同劔の卷などに見えたれと鏡」一九ウ
宿にて強盜を討し事は義経記を出處とす本朝
事蹟考に青野原といへる説はかたはらいたし
右強盜熊坂長範考所_レ答_二平戸侯隱居松浦静山君_一
之問_一也

第十郢曲一節切尺八中啓

○郢曲とは催馬樂今様朗詠なにもも歌謡の名
にて郢曲といふ一の謡物あるにあらず徒然草
野槌に此辨見ゆ今世朗詠をうたふをのみ郢曲
と心得たるはひか事也さて朗詠の曲今様の曲
神樂催馬樂風俗の曲の類呂律の声調各別なる」二〇オ
べけれど今の世の猿樂謡と長唄と相違かことく
はあらさるべし必竟は朗詠の曲にて新作の詞
をうたひ作略をも加へて今様とはいへるにや
白拍子といふは拍子とる名にて長門本平家物
語に白拍子をかぞへすましなどもあり此今様
の舞に一節切を用たるは古書ををさく見あた
らねど一節切は洞簫尺八の同属にて少しづつ
趣をかへたる也一節切の長一尺八分あるも尺
八の名に叶ひたり白拍子の作者信西入道が後
白川院に奏奉りし保元三年内宴を再興せるを」二〇ウ

り尺八をもつくり出て用たるよし続世継内宴の巻に見えたればよしあることにや寛永以後三

絃にあはせてふく一節切は宗佐高瀬などより

大森宗勲に傳はり宗勲その製作をも吹様をも

斟酌せしなるべし宗勲は和泉堺人にて紫の一

本に宗勲が切たる葛の葉風といふ銘の一節切

かとありそは紙鳶へ下卷元禄十二年刊本へ倭漢三才圖會へ十八

の卷樂器類部へ類聚名物考へ樂律部五へ雅遊漫録へ五の卷へなど考て

しらる尺八は和名抄へ音楽部へ源氏物語へ末摘花へなどに

出たればはやくより傳はれるを保元の比には「二一才

再興したる也また舞の中啓を襟にさすことさも

あるへけれど古画などの證今とみに見出がた

し中啓はいにしへの蝙蝠扇にて源氏紅葉賀に

源内侍が顔をおほひしこと見ゆ末廣といふはた

これ也今の俗間の扇は檜扇の形に厚紙を折竹

骨を用て製れるにて寶の蝙蝠にはあらず出家

の一束一本とも束本ともいひて厚紙一束へ十帖なり

中啓一本を臺に積て礼式の進物にするも蝙蝠

にてこれ古代より男女出家すへて用ひし物也

右所答平戸隱居静山老候之問也「二一ウ

○文政元年摂州能勢郡野間庄野村¹⁶民勸兵衛修^ニ理^シ

其^一居宅^ヲ於^テ梁上^ニ得^ニ古文一卷^ヲ同州池田里人山川正

宣^ハ俗稱^ニ大和屋大三郎^ノ喜^テ而^テ騰^ニ寫^シ之^ヲ記^シ其所由^ヲ於^テ卷尾^ニ云^ク此^レ建

保中左少辨藤経房朝臣遺書無^レ疑也^ト迺^テ別^ニ寫^シ二^ニ通^一

以^テ二^ニ通^一納^メ於^テ能勢陣屋之帑藏^ニ以^テ二^ニ通^一納^メ於^テ出野若

宮八幅¹⁷祠中^ニ將^ニ傳^フ於^テ不窮^ニ云^フ

○あまりをまりと書て十とせまりなどあるは賀

茂翁^ハ真^ニ淵^ノの文体にならへるにて建保の比の体に

あらず^ニ二^ニ二^ニオ

○磨^マとあるも建保の比は丸と書たるがおほし近

世の古学者磨^ハ麻呂^ハ滿^ハなど好^クて書^クことなり

○大輔判官といへる名目といぶかしこは大夫

判官をかくおもひ誤れるなるべし大夫判官は

五位したる廷尉の嘉号なりまた郡司景家とい

ふ名もいかにぞや

○御幸は院にまうす例にて西宮記北山抄などよ

り後は必^ス主^ス上^ニに行幸院に御幸と書こと也^ニこはミ

ユキとかイデマシとか訓^ムへく心得てみだりに

書たるなり建保の世の人にかゝる誤はたえて^ニ二^ニ二^ニウ

○典内侍これはナイシノスケの事を俗にスケノ

ナイシといふより典の字をスケに當てみだりに書たる也典侍を音には清てテンシ訓には清てナイシノスケと訓例也

○舟をありそにつけなどいへるありそも荒磯の約語にて萬葉におほかりこれもなきさとか磯とか岸とかいふが中むかしのくちつきなるをや

○おもぶせしてはおもてぶせといふ詞よりさか「二三オしらに思ひまうけし也

○おとゆふはをとほひの夕を省て古言らしくはなしたる也すべて古言は切約とおもへるにやへそりらがひまりげたはきゆく土手の西瓜の皮ですべるへうなりといへる狂歌さへふとおもひ出られていとおかし

○市女が笠てふものに似たると云てふといふ詞此外にも見ゆ文詞にはといふと書を歌詞には約ててふとよみ万葉にはとふともちふともよめり古本神楽哥の詞書にてふとあるのみに「二三ウて外の書にはをさく見あたらざるを賀茂翁のともすれは何てふくと書れたるを見まねびてのわざ也建保の比にはふつになき事也

○主上を八宮とまうしへ安徳天皇也崩御の後若宮八幡

とあはせ御やまひ祭りければ云々こは若宮

八幡を由縁ありげにせんとての傳會妄作也又

あはせやまひ祭りといふも例の古めかしく

作り出たる詞也

○種長は君の来見クルミの御つくり哥を原にもて来見

権現とあかめ奉れりと云々へ原は地名也来の字今ひとつすべし二四才

こは上の文に十月廿四日はつ雪ふりて道にめ

なれし山々のいとめつらしくいつもの峰に御

幸ありて初雪をめてつ々々にくる見クカれは

峯はきのふに似ずもありけり此峯を里人は来

見山あるはくるみが峰ともいふとあるうた也

これも望里なる来見権現といへる叢祠を所由

ありげにせんとてまうけ出し説なり

○従四位上侍従行左少辨藤原経房この位署いと

不審なり従四位上行左少辨侍従藤原朝臣経房

とあるべきことわりなりそは職原抄後附の位署二四ウ

式を見てもしらるゝにさるすぢもたどらぬも

のゝしわざ也又公卿補任辨官補任など考るに

経房は安徳後鳥羽などの朝に仕へて治承四年

に左中辨正四位下寿永三年に左大弁参木同年

九月に権中納言後に正二位大納言にも進たる
人也従四位上行左少弁といふこと無稽にて笑ふ

べし

○假名遣カヅカヒテ手テ尔ニ乎ハ波ハのみたりなるは山川正宣が跋
にもうけひきたるよしにしるし又経房といふ

人片田舎にさすらひて土民になり下り年さへ」二五才

おぼれての筆なればとて見ゆるしもすべしさ

れど其時代手尔乎波は正しかりしをかく誤べ

くもなく近世萬葉家といふもの出来て後の詞

つきなるもうけがたき證也古学へ万葉家の類也は実に

千古卓越の道なれど片田舎人が賀茂翁本居宣

長などの著書をよみそれに心うつりて偏見固

陋にのみなりゆき道理をさとらざるはいかに

ともせんすべなしさる方か本やぶりの村学者

ぞかゝるえせごとしいで、世をあざむかんと

はすめるそは木曾義仲がおのれうましとおも」二五ウ

へる田舎料理を猫間、黄門に強す、めけむにひと

しく鶯鳩が大鵬をわらへるがごとくなどにや

○山川正宣いみじくしんじて奥書せるはいかに

ぞや正信は本居宣長が門徒のよしきこえ仙足¹⁹

石碑の解をも著したればかゝるえせものにも

どふへくもあらじをなにゆゑにかありけむ知りてうけがひ顔したらんには学者の心にあらず不^レ知してしむじたらんには愚蒙のかぎりといふべしそもくの隆房の書を偽作せるよしはかの伊勢のわたりになま田舎学者ありてその「二六才里の叢祠をたふとげにいひなし己が家系などを世にあら²⁰さばやとおもへる愚癡心に起れる也さるは深田源内が大系圖を偽作し駿河志豆波多の社官が類聚国史の寫本に己が仕^レる社を總社のよし書加^レて世を欺^キたる類也具眼の学者一觀せばいかにつくりかまふるとも忽にその偽を見あらはしつべきを管見固陋の心より猿丸^{ダケノコ}が筭^{ヌスミクデキ}を盗折^{オノミ}て己が耳^{フタケ}を塞^グごときわざすなるぞをかしきや

第十二答荒木田久守南朝系圖「二六ウ

○尾藩儒官秦氏及津島宮司氷室氏などより尋

問としてその問書の文をもて御問の条左に御答申候

○南朝紹運録は天野信景が手より出候ものにて古本を以て増訂せし書なり後に大和人竹口栄齋増補して一書とす悉委しといへども正史に

對^{ムカヘ}考ればなほ牽強傳會なきにあらす

○宗良親王の御子尹良親王及御孫の良王の御事は浪合記の外所見なし新葉集李花集信濃宮傳などに見えて北朝にとらはれ給ひ年経て後永」二七才

和三年九月京にて薨じ給へるは宗良の御長子興長親王と申て母は狩野介貞長女也尹良親王は興長のさし次^{ツギ}の御弟にて母は知久四郎左衛門尉敦貞が女とも又は井伊介道政が女ともいへり尹良をユキヨシと訓^{ヨム}は尹は廣韻に進也と注したればユキとよみしなりされど姓名録抄拾芥抄宗二が節用集新撰類聚往来伊呂波字類抄などに太^タと訓^タてユキと訓たる例なければなほ太^タと訓^タんかたしかるべくや良は右の書ともに与^{ヨシ}とよみ拾芥抄には羅^ラともよみたれ」二七ウ

ど後醍醐天皇の御子の御名の仮名^{カナ}に書たるものにみなよしとあればこれもたゞよしとまうすべくおぼゆ浪合記も天野信景が手に書候へ

ば彼か増訂なと候はむ坎極なし²¹とは申かたく候

○日本史菊池武光が傳に菊池武朝申状を引て將軍宮とするされしは征西將軍宮懷良の御子良宗にて母は武光が妹也貞治二年誕生菊池北朝

降参の後人臣に列し後醍醐院越後守良宗と名のり九州に漂泊して死去のよし後醍醐院系図に見ゆ懐良は後醍醐天皇第十四の御子にて後村上「二八才院のさし次の御弟也明史名山蔵などには良懐とあり

○天野信景塩尻一の巻に尾張津嶋牛頭天皇祠社

傳欽明天王元年鎮座云々へ不見日本紀牛頭天王名此時未有改

曆雜事記聖武帝天平五年吉備飯朝於播磨逢牛

頭天王廣峯社記及峯相記同之按續日本紀無此

說吉備津嶋社記嵯峨帝再建云々へ日本後紀類聚國史等無下建牛

頭天王祠事當時天疫多然亦無祭牛頭天王說清和帝貞觀十一年以津

嶋天王勸請山城國祇園社三代實錄無此說二十

二社註式及改曆雜事記峯相記廣峯古證文皆以二二八ウ

播州飾磨郡廣峯牛頭天王為京師祇園本祠九國

史無牛頭天王之事然則中世以後所祭坎東鑑見

尾州津嶋社名と見えて定説なし

○倭訓栞に津嶋牛頭天王の社は嵯峨天皇の御宇

祠を建されど神名式には載せず神主の初は尹

良親王の二男良新王より起るといふ智證大師

の傳にも見えたれば由来久しとあるは浪合記

に依て書たる也尹良新王は尹良親王に作るべ

し智證大師の傳に見えたりといふは津嶋神の事にて神主を指せるにあらざして津島牛頭天」二九才
皇の事三善清行朝臣の天台宗延曆寺座主円珍、傳今昔物語、十一の十一語元亨釋書、三の卷の傳などにはみえねど圓珍山王明神を祈りしを神社考に素戔鳴神のよしいへるに起れる説なるべし津島の名は名寄の長明か歌夫木の中務のみこのうた宗長手記名所方角抄などにみゆ南朝系図を作りて御覽入候

○南朝系図へ按南朝之称始見_テ于太平記十九卷青原軍条_ニ焉_レ
(二行空白) 二九ウ

○後醍醐天皇

後宇多院第二皇子母、談天門院藤忠

子内大臣師經公、養女実、参議忠継卿、

女也正應元十一二降誕御諱尊治文保三二一

廿七踐祚延元四八十六崩葬于吉野塔尾山

陵宝筭五十一本朝皇胤 紹運録増鏡皇年

代畧記太平記

尊良親王

母冷泉為世卿女贈三位為子慶長元誕

生一品中務卿延元三三六生害于越前

国金崎城御年廿称²²一宮紹運録増鏡太

平記

守永親王

一品上野太子蓋称²³一品宮²⁴或称²⁵宇都峰宮及西應寺宮²⁶新葉集元弘日記

結城古文書

良玄大僧正

母蓋從一位右大臣公顯公女御匣殿二条関白良基公猶子入²⁷室一條²⁸三〇才

院二十四世門跡傳南朝紹運圖

女王

母大納言典侍増鏡一本南朝紹運録圖²⁹為³⁰女王二人³¹

世良親王

母參議實俊卿女遊戯門院一條上野太

守又太宰帥元徳二九十七薨称³²河端宮³³紹運録増鏡常樂記

女王

紹運録

護良親王

母民部卿三位大納言師親卿女二品天

台座主兼梨本大塔兩門跡³⁴故称³⁵大塔宮³⁶元弘元還俗同三征夷大將軍建武二七廿三

為_二足利直義_一被_レ害_二於鎌倉_一 紹運錄太平記

陸良親王

一本紹運錄圖作_二常良_一母北畠准后親房

卿妹征夷大將軍正平十五年謀反自害_レ三〇ウ

太平記寺院文書纂櫻雲記紹運圖南方

記傳按石川忠総自記遊行十二代上人_レ大塔

宮御子云_レ甲府一蓮寺系圖遊行十二代尊

觀上人龜山院御子常盤井殿一品式部卿恒

明云_レ常盤井殿第四子遊行十二代上人尊

觀云_レ此与_二石川記之說_一相矛盾

女王

母竹原八郎女

太平記

宗良親王

母同_二尊良_一正和二誕生天台座主尊證延

元元還俗一品中務卿名_二宗良_一征東將軍

天授三落飾元中二十八薨_二于遠江國井伊谷_一

年七十三新葉集者称_二信濃宮_一或上野親王

新葉集太平記天台座主記信濃宮傳

興良親王

母狩野介貞長女天授三九月薨_二于京

都_一新葉集李花集信濃宮傳_レ三一才

尹良親王

母知久四郎左衛門敦貞女或云井伊

介道政女於_二信濃國_一生害 浪合記

女王

一本南朝紹運圖大橋三河守定省室

良王

母世良田政義女住_二于尾張津嶋_一

大橋氏祖 浪合記

良新

母同_二良王_一

信重

母大橋貞元女

静尊法親王

母參議實俊卿女初諱惠尊又尊珍

嘉曆三正晦親王宣下聖護院御入

室

紹運録釋家官班記_一三一ウ

恒性法親王

大寬寺₂₃御入室元弘三十九於_二越中國_一

為_二北條_一被_レ害称_二越中宮_一 紹運録門跡

傳太平記

滿良親王

母中納言宗親卿女親子元弘三誕生称_二

花園宮_一後落飾号_二無文選₂₄禪師_一渡元歸朝

之後歷中₂₅七閏三廿二於_二遠江国_一入寂年六十

九無文元選禪師行狀元弘日記佐伯杏仙藏

古文書

恒良親王

母新待賢門院正中元誕生建武元正廿三立坊延元十月北國下降同三十七

二為足利尊氏被鳩殺年十五 太平記紹運

録増鏡

成良親王

母同上正中二誕生建武元鎌倉下向号

將軍亦上野宮同三七月為尊氏被鳩殺

年十四 太平記紹運録

看良親王 三三才

尊親法親王

又名果尊母少納言内侍四条隆資卿女 紹運録新葉集

法仁法親王

母從三位為道卿女正中二誕生初諱

躬良又省良仁和寺御入室正平六二

廿二叙二品同七十廿五遷化年廿八 紹運

録仁和寺御傳

人皇九十六代

後村上院

諱義良母新待賢門院廉子嘉曆三九月

降誕元弘三親王宣下延元、御元服三
品陸奥太守同三、八十七御即位正平廿三三
十一崩御年四十一 神皇正統記太平記元
弘日記鳩嶺雜事記花宮三代記

懷良親王

母從三位為道卿延元中九州下向居

于肥後国八代元中薨号「牧宮」或阿蘇

宮鎮西宮高田宮九州宮征西將軍宮 太平記

紹運錄後醍院系圖按明史名山藏等諱作

良懷一二二一ウ

良宗

母菊池武光妹正平十五誕生後号「後醍院

越後守」死于九州 後醍院系圖

良忠

後醍院伊豆守其子孫仕「嶋津家」

後醍院系圖

聖助法親王

母「少納言内侍菅原在仲卿」女

聖護院御入室 紹運錄

玄圓法親王

母從二位守子後「山本左大臣」女一乘

皇子 母、中納言典侍親子宗親卿女
紹運錄

皇子 母同、護良、紹運錄、三三才

皇子 母同、法仁、阿蘇宮
紹運錄

皇子 母、昭訓門院、近衛
紹運錄

權子内親王 母、後京極院為、伊勢齋宮、後光嚴院、中
宮、其後稱、宣政門院、入、于保安寺、落飾
紹運錄增鏡女院小傳新葉集作者部類

准后 紹運錄

祥子内親王

母、新待賢門院元弘三為_二伊勢齋宮_一稱_二前齋宮_一後入_二于保安寺_一落飾号_二長慶門_一歷代皇記新葉集紹運錄作者部類南朝

院_一
紹運圖

妣子内親王

女同_二護良_一今林尼衆
紹運錄_一三三ウ

帷子内親王

一品異本紹運錄
作_二權子_一

欣子内親王

母新待賢門院今林尼衆号_二鷲尼_一
紹運錄作者部類

皇女

母同_二世良_一今林尼衆

皇女

母、遊義門院、左兵衛督、局為忠卿女
今林尼衆 紹運錄

皇女

母同_二尊良_一
紹運錄

皇女

紹運錄

皇女

紹運録「三四才

皇女

母後宇多院權中納言女房
紹運録

皇女

母基時女
紹運録

皇女

母民部卿局関白基嗣公室
後離別 紹運録

皇女

母一品實子山階左大臣女
紹運録

皇女

母大納言局
紹運録

皇女

母坊門局
紹運録

皇女

母後室町院

紹運録「三四ウ

皇女

母同「法仁」²⁶

○
後龜山院

人皇九十七代

母嘉吉門院福恩寺閔白女也諱熙成正

平廿三三月御即位元中元²⁷閏十月与^三北

朝「御和睦之後住^三于嵯峨大覺寺」應永元二廿

二²⁸太上天皇即日御落飾法諱覺理灌頂又金

剛心同卅一四十二崩宝筭末^レ詳 紹運録和

漢合運吉野拾遺椿葉記皇年代畧記

母同上諱寛成

長慶院

称^三玉川宮^一花咲松

尊聖大僧正

日本史

惟成親王

母大藏卿局中努卿又式部卿又太宰帥

落飾之後号^三梅陰祐常^一 古今系圖新葉

集五百番歌合「三五才

秦成親王

母同^三後龜山院^一正平十五年誕^三生於住吉^一

太宰帥及式部卿後為_二後龜山院太子_一元

中_レ薨 新葉集南朝紹運圖

世恭親王

母從_レ二位教子

說成親王

母新待賢門院冷泉上野太守号_二護性院宮_一或五常院宮 南帝系圖諸門跡譜

圓悟大僧正

母楠正儀女住_二于圓滿院_一諸門跡譜

帥成親王

兵部卿出家_{シテ}号_二惠梵_一新葉集李花集奧書

良成王

鎮西宮 古系圖

憲子内親王

一品宮 新葉集「三五ウ

皇子

小倉宮

御母中宮信子土御門右大臣顯信卿女也住_二于嵯峨_一椿葉記

教尊大僧正

諱恭仁後勸修寺御入室大僧正兼_二安

詳寺々努^一 椿葉記諸門跡譜

尊義王

万壽寺宮空因還俗^{シテ} 称^ニ尊義王^ニ 嘉吉三九廿

三乱^ニ入于北朝内裏 篡^ニ神器^ニ 後敗死^ス

椿葉

記櫻雲記南方記傳

尊秀王

母色川左兵衛盛定女也 一宮又稱^ニ自天親

王^一長祿元於^ニ吉野山^一被^レ害 上月記南方記

傳後崇光院御記

忠義王

二宮或称^ニ河野宮長祿元於^ニ吉野山^一被^レ害

上月記南方記傳^一 三六才

尊雅王

長祿二六月被^レ害

上月記

○系統未詳之分

最惠法親王

南朝紹運圖後西^ニ皇子母^ハ山本左大

臣^ノ女新葉集異名見^ユ一説^ニ玄圓法

親王御周人云々

深勝法親王

龜山院御孫父常盤井式部卿恒明親王
為後村上院御猶子後住于相

模藤沢山遊行十二代上人稱南門跡新葉

集紹運録南朝紹運圖按甲府一蓮寺遊行十

二代上人系圖常盤井恒明御子弟一帥親王

全仁第二西西寺座主二品親王深勝第三西

西寺座主一品親王杲尊第四遊行十二代上

人尊觀為後村上天皇之太子云々

仁譽法親王

深勝法親王御弟東南院入室

新葉集紹運録南朝紹運圖「三六ウ

懷邦親王

一本南朝紹運圖後二条院皇孫式部

卿邦世親王子天野信景説為後西西

皇子

尊融禪師

南朝紹運録為後西西皇子

保安寺宮春蘭和尚

石見宮

正平七五十一於八幡山被討

豫章記

植田宮

後愚昧紀云天授三八十一故宮僧正御

子植田宮於鎮西被討

應永初起兵於東國廳而自害

高田宮

陸奥河沼郡牛澤組塔寺澤八幡宮長帳

右南朝系圖取捨花咲松南山巡狩録殘櫻記等之

説而作之

第十三宰相大将「三七才

○源氏物語葵の卷へ湖月抄本第一頁へにたゞ春宮をぞいと

恋しうおもひきこえ給御うしろみのなきをう

しろめたうおもひきこえて大将の君によろづ

きこえつけ給ふもかたはらいたきものからう

れしとおぼすまことやかかの六条の御息所の御

はらの前坊の姫宮菊宮にゐたまひにしかば大

将の御心ばへもいとたのもしげなきを云々

○河海抄へ葵の条へに源氏参議大将事天平神護元年改

授刀衛為近衛府平城天皇大同二年四月廿二日

改近衛大将藤原朝臣内麻呂へ大納言真楯男へ為左三七ウ

近衛大将改中衛大将坂上田村麻呂へ従三位葛田

丸男へ為右近衛大将

参議兼大将例

へ右大臣不比等男へ藤原房前へ中衛大将へ

〈左大臣武智丸男〉同 豊成〈中衛大将〉

〈右衛士、府生國勝男〉吉備真吉備〈中衛大将〉

〈参議乙丸男〉藤原是公〈同上〉

〈右大臣清丸男〉大中臣諸魚〈近衛大将〉

〈右大臣是公男〉藤原雄友〈中衛大将〉

〈大納言真楯漢〉同 内麿〈近衛大将〉三、八才

〈正四位下大原男〉文屋綿麿〈左近衛大将〉

〈右大臣内丸男〉藤原冬嗣〈左近衛大将〉

〈右大臣繼繩男〉男 乙叡タケト〈中衛大将〉

〈兵部卿綱繼男〉藤原吉野〈左近衛大将〉

〈贈太政大臣清友男〉橘氏公〈右近衛大将〉

〈右大臣良相男〉藤原常行〈右近衛大将〉

〈右大臣師輔男〉同 伊尹〈左近衛大将〉

○花鳥餘情〈葵の条〉に源氏の君を大将といふこと此卷

よりはじまる也大将は参議より丞相までも兼

帯する職也源氏は此時参議大将なり云々三、八ウ

○源氏物語、若菜の上卷〈湖月抄本第九頁〉に廿がうちには

納言にもならずなりにきかしひとつあまりて

や宰相にて大将かけ給へりけん云々

○栄花物語、布引瀧の卷〈印本十九の卷廿一頁〉に大将にはと

の、三位中将宰相にならせ給て大将かけさせ

給ひつ云々へ按承保四年四月九日藤師通參木大将になられしことなり

○公卿補任、白河院、承保四年へ十一月十七日改元承暦の条に参

議正三位藤師通三月廿七日任、正中将、四月九日

兼左近衛大将、十二月十三日任、權中納言、十六云

々へ按に補任中、此外參木大将の所見あり、三九才

○官職秘抄へ上卷参議の条に兼大将、例氏公常行二條

關白内大臣云々へ按に氏は公は右大臣橘氏公也常行は藤冬嗣公孫良相公男なり

関白内大臣は後二條関白師通公也承暦元三廿七任、参議、同四月九兼左大将

與清按に宰相大将とも参議大将とも通はし書

るは宰相は参議の別名なれば也寛正本、職原抄、

首書へ奥書に寛正五年甲申五月上旬之條以權大外記隼人正家、本書寫讀合了とあり余が許

に物学せらるゝ渡邊轉ぬしの家に祕傳せられたり、に書此官、則参議書之

呼、其人、則曰、宰相殿、也有八人、而紛、則加、氏呼、宰相

相藤、宰相、也云、首書印本に書、位署、時、参議、也呼、

名、時、宰相也、書、時、或、源、参議、菅、参議、呼、名、之、時、藤、宰、三九ウ

相平、宰、相、也、人、多、故、以、氏、別、云、と見ゆ、漢土の宰

相は上相の事にて其義は高承が事物紀原へ四の卷

にくはし本朝宰相の名始て續日本紀へ十の卷神龜五年三

月丁未の段に出たれど公卿にわたれる称にて参議

にかぎらねは参議の別名に定めいへるはそれ

より後なるべし参議は職員令に大納言四人掌

參議スルコトヲ庶事ヲ義解に謂與ハ右大臣以上共參議スル也天下之

庶事ニ云々續日本紀ハ二の卷大宝二年五月丁亥の条ニ勅シテ從三位

大伴宿祢安麻呂正四位下粟田朝臣真人從四位

上高向朝臣麻呂從四位下下毛朝臣古麻呂小野一四〇オ

朝臣毛人一令シテ參議朝政ニ云々などあるは定れる官

名とも聞えず公卿補任に大寶二年以後代々參

議の官ありしゆえに記されたれどこは後の書カキ

續の条なれば信かたし補任ハ靈龜三年十一月十七日改テ為シ養老元年ニ

に靈龜三年十月廿日從四位下藤朝臣房前任ニ參

議ニ云々續紀ハ十一の卷天平三年八月丁亥の条ニ依テ諸司擧ニ擢テ式部

卿縣守兵部卿從三位藤原朝臣麻呂大藏卿正四

位上鈴鹿王左大辨正四位下葛城王右大辨正四

位下大伴宿祢道足六人並ニ為シ參議ニ云々などある一四〇ウ

を實任の始とやすべきまた權參議准參議非參

議あり權參議は續紀ハ十の卷天平元年二月壬申の条ニ以テ太宰

大貳正四位上多治比真人縣守左大辨正四位上

石川朝臣石足禪正尹從四位下大伴宿祢道足一權ニ

為シ參議ト云々補任ハ神龜六年八月五日改テ為シ天平聖曆元年ニに神龜六年

二月日多治比真人縣守任ニ權三木一三月二日叙ニ從

三位一兼シ太宰大貳ト云々また天平三年八月日從三

位藤原朝臣麻呂任ニ權參議ニ云々官職秘抄ハ上卷ニ參議

の条に権参議、例天平元年云々（按に元年は三年の誤也）など
見ゆ准参議は補任（平城天皇の条）大同元年閏六月三「四一才
日従四位吉備朝臣和泉任准参議云々官職秘抄（上卷）
参議の条に准参議、例大同元年云々とあり非参
議は一概にいひがたしそは位に就て云々と官に
就ていふとの二種あり三位以上の人の官なく
て位ばかりなるをいふ一なり最初より官に任
ぜず位ばかり進たる亡三位以上と官をば辞し
て位ばかりになりたる散三位以上とを共に非
参木と称す又参木の官に任じたる人の致仕し³²
して前官にてあるは四位にても非参議の例也
これらは位に就ていふ非三木にて職原抄「近衛」四一ウ
大将篇の首書に二三位以上之人無^{キヲハ}官職一者都曰^{テフ}
非参議、但前宰相雖^{ハトモ}四位、又是非参議之列也^也
太宰大貳の篇に所謂非参議、四位是也といひた
るにて明也又位は四位にても参木に任ずべき
人のいまだ参木に任ぜずしてあるほどをいふ
二なり源氏物語帚木の巻になま／＼のかんだち
めよりも非三木の三四位どもの世のおほえく
ちをしからずもとのねざしいやしからぬか云
云これは三木已上を公卿としてそれに對て三木

ならぬ家族イダガのものを非三木の三四位といへる」四二才

也へ若菜の上巻にも非参木の四位とあり同書竹川の巻に右兵衛督

右大弁にてみな非参木なるを云々是は三木に
任ずべき人のいまだ任ぜざるほどをいへる也

へ藤の³³裏葉の巻にも非参木のほどなにとなきわか人こそふたあゐはよけれど有職

原抄蔵人所の篇に非参木大弁とあるも同義也

試コノロミには左右大弁左右中将左右衛門督左右

兵衛督蔵人頭年勞ある左中弁式部大輔の御侍

讀たる人へ本朝文粹六の卷正四位下式部大輔菅原文時の請状に非参議之四位中文時

已ニ為第一也ともみえたりなどみな非参木の四位也これら

は官に就ツキていふ非三木也参議はもと朝政に参マンスリ」四二ウ

議ハカルよしの称にてその朝政に與アツカらぬは非参議也

また参議の官に任ずべき人のいまだ任ぜざる

ほど或は位階のみ進スベたるなども非参議³⁴にて公

卿補任に従三位長屋王和銅二年十一月一日非

参議云々従三位藤原朝臣武知麻呂養老二年非

参議云々従三位藤原朝臣宇合神龜三年正月七

日非参議云々従三位藤原朝臣弟真天平四年正

月非参議云々などおほかり参議権参議非参議

を並置ナラベオカれし事も見ゆ寶積類書へ十二の卷官職部へに圓城

寺殿類聚抄非参議弄花云不任セ参議二三位之人」四三才

又公卿前官共称_二非参議_一、畢竟不_レ預_二大政官之政務_一、
人之事也。花鳥餘情云、不_レ任_二参議_一、三位四位称_二非参
議_一、ともありかく官位に就_{ツキ}て非三木の称あるを
分別すべし。参議の字面漢書、公孫弘傳に與_二参
議_一云々、母将隆傳に與_二参謀議_一云々、匡衡傳に與_二参
事議_一云々などみえたれど直にいへるは後漢書、
賈復傳に與_二公卿参議_一、國家大事云々、班固傳下に
為_二中護軍_一、與_二参議_一云々、董均傳に輒令_二釣_三参議_一云々、
晋書、孝武定王皇后傳に臣等参議云々、周書、竇熾
傳に常與_二参議_一云々などあるを出処とす。又参議「四三ウ
を八座といへるも別名也。職原抄へ上卷」参議の条に
八座者異朝八座、其職各別也。本朝、聖武天皇、天平
三年置_二参議_一、大同、御宇罷_二参議_一、置_二五畿七道觀察使_一、
へ合八人、弘仁、御宇罷_二觀察使_一、皆為_二参議_一云々、八人、自_レ此
而始依_レ之有_二八座之號_一云々、百寮訓要抄に参議云
云、是はむかしより八人當時も子細なし八座と
申也云々、故實拾要へ十二の卷、参議の条に當官を八座
ノ臣ト云、是非_二唐名_一、八人八疊、二列座ス故、二八座
ノ臣ト称ス云々、文德實録、八の卷、へ齋衡三年四月庚寅の条、に
恨_レ不_レ登_二八座_一云々、本朝文粹、六の卷、へ菅三品請_二從三位_一、状、に伏、四四才
檢故實儒者之式部大輔以十年已下勞必拜八座

之例云々など見ゆ漢土の八座は晋書職官志に後漢光武以三公曹主歲盡考課諸州郡事改常侍曹為吏部曹主選舉祠祀事民曹主繕脩功作鹽池園苑事客曹主護駕羌胡朝賀事二千石曹主辭訟事中都官曹主水火盜賊事合為六曹拜令僕二人謂之八座尚書雖有曹名不以為號靈帝以侍中梁鵠為選部尚書於此始見曹名及魏改選部為吏部主選部事又有左民客曹五兵度支凡五曹尚書二僕射一令為八座云々唐六典へ一の卷尚書令の条に後漢以三 四四ウ尚書令僕射及六曹尚書為八座云々今則以三二丞相六尚書為八座云々杜氏通典へ廿二の卷歷代尚書八座附の条に八座後漢以三六曹尚書拜令僕二人謂之八座魏以三五曹尚書二僕射一令為八座宗齋八座與魏同へ晋梁陳不言八座之數隋以三六尚書左右僕射及令為八座大唐與隋同云々へ文献通考五十二の卷職官考説亦同へ此外所見おほかれど本朝の八座と異也又相公といふも参議の異名也いにしへ善相公藤相公澄相公菅相公野相公江相公へ已上本朝文粹所見などきこえ故實拾要へ十二の卷参議の条に相公ト云モ参議ノ非唐名といへりこ 四五才れも漢土にては丞相を尊称せる也文選へ廿七の卷行旅下へ王仲宣か従軍詩に相公征関右注に善曰曹操

為^ル丞相^ニ故^ク曰^ク「丞相公^ト也とあるにて知べしさて参議

の和名は和名抄へ五の卷職官部」に本朝式員令^ニ云^ク「参議於^テ

保万豆利古止比止とみえたるを北山抄袋草紙

職原抄聞書寶石類書などやうの書にマツリゴ

トマウチギミ或はマジハリハカルなどよめる

は誤也高大夫實無が百寮倭歌に参議をよみ

かける道に賢き名を得つゝものしり人や今ぞ

みしらんとよめり³⁶後拾遺集序にやくものつか」四五ウ

さにそなはりて云々藻塩草へ十五の卷人倫異名部」に宰相

やくものつかさ云々異名分類へ二の卷人倫部」に八座職^{ヤシラノツカサ}

坎云々綺語抄へ中卷官位部」にもろゆき宰相をいふ云々

第十四いわちどりのいわさいわけなきす

は小きをいふ長洲の濱名草の濱千鳥

○兼輔卿集に女のうらみてなきけるに「いわ千

鳥あやなかるねはたれゆゑにながすの濱のな

かずもあらなん女かへしゝ物思ふなぐさの

濱のいわ千鳥なくさむ間にぞなきまさりける

松永氏へ貞徳」云へ歌林樸楸一の卷」岩千鳥ハチトリノ名也云」四六才

云與清曰此説ひがこと也貫之朝臣自筆の本へ堤中納言

集」にもいわちどりと書れて岩とは假名だがへ

り濱千鳥浦千鳥河千鳥などはその住所により

ておほせし名なれど岩千鳥といひてはことわり
きこえず今按にいわ千鳥は驚オドロきさわぐよりい
へる名なるべし日本紀雄略紀〈前紀〉に駭オドロ愧イワケ
アワテ、云々安閑紀〈元年〉に驚駭イワケテ云々皇
極紀〈二年〉に喘息イワケテ云々などみな驚きさわ
ぐ³⁷意の字をいわけと訓ヨミたり〈釈日本紀秘訓同〉さて轉ウツ
りては物語書に幼稚をいわけなきといへるも「四六ウ
物におとろきやすきよしの名也源氏物語紅葉
賀に心なげにいわけてきこゆるはなどさぶら
ふ人にもきこえあへり云々夕霧になほいとい
わけてつよき御心おきてのなかりける云々繪
合にゆめにもいわけたる御ふるまひあらばこ
そ云々螢にいわけたるひゞなあそびなどのけ
はひの見ゆれば云々榮花物語かゞやく藤壺に
いわけたることなく云々などあるも幼くこめき
たるさまをいへり契沖阿闍梨〈源注拾遺二〉いわけ
といへるはいわけなきなればいわけなきもな「四七オ
きは付たる字にておほけなきの類也無ナシの字の
心にはあらぬなるへし云々谷川氏〈士清〉云〈倭訓栞三〉い
わけなき幼稚を物にかくいへりいとけなしと
おなじ物におどろきやすき時なれば驚駭をい

わけといふ義に通へりいわけてとも侍れば是もなきは助の詞なるべし云々師説〈春海翁〉云〈假字拾要〉伊は宇比の約にて稚の義和氣は若の義にてうひわかきといふ詞ならん坎駭の字をいわけてと讀るもをさなき人は物におどろきやすきものなれはおどろくことをいわけといふにやとも」四七ウおもはるされと此詞さだかにはいひがたし猶正しき證を得るをまつべしまた紀に喘息の字をイワケと訓るはおどろくをイワケといふより轉じたる訓と見ゆイワケハ息涌の義坎イキをイとのみいへることもワクをワケとかよはしいへることも古語おほし喘息の字をよめるが此語の本義なるべしさて物におどろく時はいきづかひなともあらげになるものゆる驚くことにもいひ又をさなき人は心しづまらでいきづかひなどしづかならねばをさなき事をもしかい」四八オへる也云々與清曰いわけなきといふ詞三代實録の宣命に幼少へ八の卷卅六の卷幼穉へ廿九の卷也などの字を訓たりされどこれはイトケナキとも訓つべし古今六帖〈三の卷〉に「あふことのかたよせにするあみの目にいわけなきまで恋かゝりぬる夫木抄

〈雑十六〉に知家へ世の中はいわけなき子のおもぎ

らひ見しがなきにはねこそおかるれ³⁸などよめ

り物語の詞に見えたるは擧^{アゲ}つくすへからず是^{コレ}
等を思ひわたしていわ千鳥は駭^{イチャトリ}千鳥の義なる

ことしるべしいわはよわと通ひて心よわく驚き」四八ウ

さわぐよしの詞ときこゆ萬葉集へ七の巻〉に「佐保^{サホ}

河爾小駭^{カハニアツフチドリノサ}千鳥夜三更^{ヨフケテソノコエ}而爾音聞者宿不離爾^{バインネラレナクニ}とあ

る小駭千鳥をアソブチドリノと訓る古訓うけ

がたし駭は説文に馬疾歩^セ也玉篇に奔^セ也詩小雅

注に小疾^{コキヤフ}曰^レ駭^トまた凡疾速^ヲ曰^レ駭^トなど見え雄略紀

〈前紀〉に駭^ハシリテとも訓たれは雉のさをども鮎^{アユ}

のさばしるなどにむかへてサバシルチドリと

も訓^{ヨム}べく又イワケチドリとよまんもしかるべ

し駭^{オドロキ}てさばしりさわく義なれば也壬生忠岑の

〈夫木抄夏二〉へ夏川のいはねをわくるいわ千鳥つひ」四九オ

にさてやは世をば過さんとよめる歌によりて

岩根をわくる物なれば岩千鳥といふと思ふへ

からすわとは³⁹通音なればかくいひ重^{カサネ}ねたるの

みにて古歌に例おほし此歌の意は岩根のかた

きをわくるいわ千鳥のごとく思ふを通らでや通

すらんとよめりいわ千鳥によわといふ詞をよ

せて女の心づよきに己が心よわきよしをそへ
たる也又清輔朝臣〈家集〉の水草隠^ス橋といへる題に
てまこも草たづきもしらず成にけりいわけ
のすゞや沼のまる橋といふ歌ありいわけのす」四九ウ
ずは弱^{ヨウ}氣のすゞにてまこも草の力^{チカラ}なきさまな
るをいふ軟すゞとは草木のしげりたるをいふ
詞にてすゞめがくれ〈曾丹集〉すゞめとなれるかげ
へ山家集夫木抄夏二〉などよめりそはしゞの通音にてしげ
みの事をいふしゞとは繁^{シゲ}きをいへるにてしゞ
ね〈散木集〉などもおなじ此しゞねすゞめのゆゑよ
しは末にいふべし此歌の意はまこも草の便^{タマシ}もし
らぬばかり生^{オヒ}しげりたればそのよわけなるす
ずのしげみの上をや橋にはかへて渡るべきさ
れどたふれまろひぬべく思ふよしをよせてま」五〇オ
ろばしとはよまれしなるべしそれに篠^シをもす
ずといへはやがて篠^シにとりなして射^{イワケ}分の篠^シ矢^ヤ
とよせられたりとも聞ゆさてはしめの兼輔朝
臣の歌の意は女をいわ千鳥にたとへていわ千
鳥よしる⁴⁰あやなく無益に泣音たつるは何ゆゑ
ぞなかすの濱といふもあるに濱は千鳥の栖^{スミカ}處
なればその名を思ひて泣^{ナカ}ずあれかしとよみ

かけられたる也女のかへしの意は名字の濱といふ名によりて物おもひもなぐさむやおも

ふに中／＼なげかれていよ／＼泣^{ナキ}まざると也な⁴¹か^カ五〇オすの濱は日本紀〈履中紀五年〉に出^テ於^ス是^ノ渚^ノ崎^ニ一令^ム祓^ハ除^セ云

云谷川氏〈土清〉云〈通紀十七の卷〉撰津國河邊郡長洲村云と拾遺集〈恋一〉よみ人しらず人しれずおつる泪は

つのかのながすと見えて袖そくちぬるまた

〈恋五〉よみ人しらずこひわびぬかなしきこともな

くさまんいづれながすの濱べなるらん空穂嵯

峨院にしほたることこそまされ世の中を思

ひなかつのはまかひなくて相模家集にいの

ちだにながすにあらはつのかのなにはのこと

そうれしかるべき又つのかのなにはの事」五一才

もおもはずて長洲にあそふたづのよをしれ為

家集〈新撰六帖〉わが袖の海となる尾は津のくにの

ながす泪のつもり也けり勅撰名所和歌抄出〈濱部〉

に長洲濱撰津河邊郡云と十四代集名寄〈濱部〉にナ

カスノ濱撰云と歌枕名寄〈十六の卷〉に撰津國長洲濱

云と類字名所和歌集〈三の卷〉に長洲濱撰津河邊郡

濱河尾云と陸西遊行囊抄〈三の卷〉に長洲は神崎川

ノ西邊神崎ノ駅ノ南ヲイフ云と撰津志〈八の卷〉河

邊郡、村里部に東長洲中長洲西長洲属^ス一邑^ニ云々

撰陽群談〈五の卷〉に長州濱川邊郡長河村⁴²ニ属ス云「五一ウ云此外古歌も古書の所見もあまたあれどふよ

うなれば引出ず名草の濱は和名抄〈五の卷〉の紀伊國、

郡名に名草奈久佐國府云々日本紀〈神武紀〉に六月

軍至^テ名草邑^ニ則誅^ス名草戸畔者^ヲ云々〈旧事紀同〉舊事紀〈四の

卷〉に紀伊名草姫為^レ妻云々また〈五の卷〉紀伊國造智

名曾妹名草姫為^レ妻云々續日本紀〈三の卷四の卷九の卷廿六の

卷卅の卷卅四の卷卅五の卷〉より後の史に名草郡おほく見ゆ

日本後紀〈廿一の卷〉に弘仁二年八月丁丑廢^ス紀伊國菟

原名草賀太三驛^ニ以^レ不^ル要^ナ也云々また〈廿二の卷〉弘仁三

年四月丁未廢^ス紀伊國名草驛^ニ更置^ス菟原驛^ニ云々延^一五二才

喜式〈式部式〉に名草郡為^ニ神郡^ニ云々萬葉集〈七の卷〉に^ナ名

草山事西在来吾恋^ニ千重^一重名草目名國後撰集

〈恋三〉よみ人しらず^ズきのくにの名草の濱は君なれ

やものいふかひありとき^トつる夫木抄よみ人

しらず^ズきのくにのなぐさの濱に貝ひろふあま

のめざしのおと^トなりせば新撰哥枕〈八の卷〉有家

へ思ふことしばしなくさの濱千鳥あとこそかよへ

和歌の浦浪此外古歌おほかれと證にすべから

ぬをば引出ず紀路歌枕抄に名草浦山名草郡紀

三井寺村の山をいふ浦山共に此所也云々玉勝」五二ウ
間へ九の巻へに名草山は紀三井寺也云々紀伊名所圖

會へ五の巻へ海士郡部に名草山三井山の惣名也名ぐ

さの濱は名草山の西のふもとに有云々與清曰

千鳥は百鳥五百津鳥百千鳥に對へて多の鳥を

させる名なれど萬葉集に河千鳥夕波千鳥など

よめるは一種の物ときこゆ和泉式部家集へ四の巻へ

詞書にはちどりのこと⁴³ひとつたてる源平盛衰

記へ卅一の巻へ青山琵琶の条には二羽の千鳥飛出テな

ともありこは貝原氏へ篤信へが千ドリ河海ノ水邊ニ

アリ種類⁴⁴アリ其形鵲鴿又鳴ニ似タリへ大倭本草十五へと」五三オ

いへる物なるべしそは百千鳥もあまたの鳥を

ことし千鳥の歌は瓊々許根尊の濱津千鳥とよま

せたまへるをはじめとすへ神代紀下へ千鳥百千鳥のこと

は末にいふべし

第十五多嶮摩知余の心の乎与の心の乎大坂

山口がてんかも當麻

○日本紀へ十二の巻へ履中紀天皇御歌にへ於明佐箇珥阿

布夜烏等謎鳥游知度沱摩哆駄珥破能邏孺多嶮

摩知鳥能流紀文に爰仲皇子畏有⁴⁵事將⁴⁶殺⁴⁷太子密」五三ウ

與^シ兵圍^ニ太子宮^一時^ニ平群^ノ木菟宿稱物部^ノ大前宿稱^ハ漢^ニ

直^レ祖阿知使主^ニ三人啓^ス於太子^ニ云^ニ不^レ信^ヘ一云太子醉以不^レ起^レ

故^レ三人扶^ニ太子不^レ在^レ令^レ乘^ニ馬而逃^之一云大前宿稱抱^ニ太子而乘^レ馬^一仲皇^ツ

子不^レ知^ニ太子不^レ在^レ而焚^ニ太子宮^一通^ニ夜火不^レ滅^ニ太子到^ニ

河内國^一埴生坂^ニ而醒^之顧^ニ望難波^一見^ニ火光^一而大驚^急ニ

馳^之自^ニ大坂^一向^レ倭^至于飛鳥山^一遇^ニ少女於山口^一問^之

曰^レ此山有^レ人乎對曰執^レ兵者多^ニ滿^ニ山中^一宣^ニ廻^ニ自^ニ當摩^一

經^一踰^ニ之太子於^レ是以^レ為聽^ニ少女言^一而得^レ免^レ難^ニ則歌^之

曰云^ニ古事記^一中卷^一履中記^ニ伊邪本和氣命^一云^ニ到^ニ于

多遲比野^一而寤^ニ云^ニ到^ニ於波迹賦坂^一望^ニ見難波宮^一其^一五四才

火猶炳^云到^ニ幸大坂山口^一之時^ニ遇^ニ一女人^一其女人

白^之持^レ兵人等多^ニ塞^ニ茲山^一自^ニ當岐麻道^一廻^ニ應越^ニ幸爾

天皇歌^一曰云^ニ與清日^一哆嶠麻知^ハ曲道^をいふ紀^レ

文に當摩經と書れしも直路ならぬよし也さい

ふよしは常陸風土記に行方郡當麻郷古老曰^ク倭^{ヤマト}

武^{ダケ}天皇巡行^過于此郷^ヲ有^ニ佐伯^一名曰^ク鳥日子^一縁^ニ其逆^一

命^レ隨^ニ便^一路^一煞^ニ即幸^ニ屋形野^一之頓宮^一車駕所^ニ經^ニ之道^一狹

地^ト深^ク淺^ク惡^ク路^之義^謂之^ニ當麻^一俗^云多^ニ支^ス斯^一と見え古事

記^一中卷^一景行記に倭建命云^ニ到^ニ當藝野^一上^ニ之時^ニ詔^レ者^ハ

吾^ア心恒^ツ念^ハ自^レ虛^ニ翔^行然^ル今^ニ吾足^不得^レ步^一成^ニ當藝斯^一形^一五四ウ

故^レ號^ニ其地^一謂^ニ當藝^一也^一美濃國多藝郡^一とあるも御足の曲り

て舟の舳スズシの如ごとなれる也ナリへ舳スズシはか今の梶カガ也委クかぢ緒ヲの条にいへり
出雲國の多藝志タギシ之小濱コハマもへ古事記上卷へ濱辺ハマノヘの曲マカれる

よしの名なるべし當麻タマてふ地名イデも出来キし也ナリま

た多伎タキてふ地名ノ神社ヤシロの名など諸國ツクニにおほかる

は曲道マカミチによれるも瀑布フタツによれるもあるへけれ

ば其地キチを極キハめずては解トキがたし多岐麻タキマの麻マは稻イナ

日都麻ヒツマ佐サと木津麻キツマ浦末ウラマエなどの麻マにて地の廻マハリた

るさまを云詞也浦箕浦廻ウラヒなどもおなじ御歌ミカの

意は大坂オホサカに遇アハる少女メウメに道ミチとへば直路ナオミチをば告ツず」五五才

して曲道マカミチを告ツたるよし也阿布夜アブヤの夜ヤは助辞ツ鳥トリ

等謎鳥トトメトリの鳥トリは爾ニの心ココロの鳥トリ也また余オノの心ココロの鳥トリと

してもきこゆ仁徳記ニトクキへ五十年へ歌ウタに和例ワレ鳥斗トリト波輸ハス儼ゲン

云イハと允恭記インキョウキへ十一年へ歌ウタに余留ヨルト等ト枳キと弘ヒロ云イハと萬葉

集三の卷ミツノクマ赤人アカヒト宿祢歌ヤクニカに衣借キヌカサマシ益マシ云イハと六の卷ムツノクマに

不オホホ所ホ念ネ来キ座マ君キミ乎ニ佐保川サホカハ乃ナリ河蝦カハツ不キカセ令セ聞ク還カ都流香ツルカ

聞十五の卷ミナモトノクマに伊徹イトク妣ハハ等ト乃ナリ伊豆良等イヅラ和禮ワレ乎ト等婆トハ

波云ハとこれらの鳥トリは余オノの心ココロ也また古事記コトヰへ上卷ウヘノクマへに

伊邪那美命イサナミノミコト先言サキコトニ阿那迹夜志アナトシヤシ愛エ袁エ登ト古袁コノエ後伊邪チニイサ

那岐命ナギノミコト言イハニ阿那迹夜志アナトシヤシ愛エ那袁ナノエ登ト賣メ袁エ云イハと素戔嗚尊スサノヲノミコト」五五ウ

御歌ミカへ古事記上神代記コトヰノカミヤマトに曾能夜幣ソノノヨヒ賀岐袁ガキエ云イハと日本武尊ヤマトタケノ
の御火燒ミヒタキ之老人歌オキナノカへ古事記景行記コトヰノサカヤマト日本紀ヤマト景行記サカヤマト熱田大神縁起アツタノオホカミノキナヘに比迹ヒト

波登袁加袁云々などは余にかよへる袁なり於
明佐箇は坂の大なるによれる名にて諸国にお
ほし於佐加といふも朋を省ていへるのみそは
小坂長坂などいふ地名に對へおもふべしこの
御歌のは大和河内の堺にて二上山の北を越る
道也本居氏へ宣長へ曰へ古事記傳廿五の卷へ若櫻宮の段へ古事記履中記へに
大坂山口とあるは河内の方より上る口なり又
孝徳天皇の大坂磯長陵も河内石川郡にて此山」五六才
へ二上山也の西面也さて此道はいにしへはむねと往
来し大道なりしを今はさはかりの大道にはあ
らず穴蒸越といひて葛下郡穴蒸村と云より河
内国古市郡飛鳥村に到り古市などを經て難波
の方にかよふ道也さて穴蒸村に並ひて逢坂
村と云あるは大坂なるべきを後世にはおほと
あふと一ツに唱るから誤りて逢の字を書なるべ
し云々さて此地の古書に見えたるは和名抄へ六の
卷へ大和国葛上郡郷名に大坂云々へ印本に太坂と書るは誤なりへ
神名式へ上卷へ大和国葛上郡大坂山口神社云々へこは大和」五六ウ
の方より上る山口にて此御哥よませ玉へるは河内より上る山口なれば東西の別ありさて和
名抄には葛上郡と見えたるに神名帳に葛上郡と有は堺近きゆゑ此方彼方に隸たることありし
にて別処にはあらずへ崇神記へ古事記中へに大坂神云々應神記へ古事

記〕に大坂道中云々履中記〔古事記下〕に到大坂山口云云
云崇神記〔日本紀五〕に武埴安彦與二妻吾田媛一謀反逆與
師忽至各々分道而夫從二山城婦從二大坂共入欲襲二帝
京云々また倭迹々姬命云々箸撞陰而薨乃葬於
大市一故時人号二其墓一謂箸墓一也是墓者日也人作夜
也神作故運二大坂山石一而造自山至于墓二人民相踵
以手通傳而運焉時人歌曰、飫明佐介珥菟藝二五七〇
廻煩倒屢伊辞務邏場多誤辞珥固佐麼固辞介氏
務介茂此歌の意は大坂に継登りて重立る磐石
群なれどかくおほくの人の手越にして箸墓ま
て取傳へんには遂に越得んかと也介氏務は得
ん也万葉に不勝不得などの字をかてなくとよ
みて介氏は將勝將得などいふにおなじ箸墓は
大和城上郡箸中村にありて其間近からす天武
紀上〔日本紀廿八〕に初將軍吹負云々遣二佐味君少麻呂一
率二數百人一屯二大坂云々また間近江軍至自二大坂道一
而將軍引軍如二西到當麻衢云々また將軍吹負既二五七ウ
定二倭地一便越二大坂一往二難波云々同紀下〔日本紀廿九〕に八
年十一月云々初置二關於竜田山大坂一〔印本誤て大江と書たり〕
山一仍難波築二羅城云々續日本紀〔十五の卷〕に斐太始以二
大坂山沙一治二玉石一之人也云々三代實録〔二の卷〕に授二

大和國從五位下大坂山口神正五位下云々また

〈三の卷〉大和國大坂山口神遣使奉幣為風雨祈焉云

云諸陵式〈延喜式廿一〉に大坂磯長陵云々新撰姓氏錄

〈十七の卷〉に大坂直云々孝德帝在河内國石川郡云々

萬葉集〈十の卷〉歌に大坂乎吾越來者二上余黃葉流

志具禮零乍この二上は神名式〈上卷〉に葛下郡葛木五八オ

二上神社と見え萬葉集〈二の卷七の卷十一の卷〉にもよめる

歌おほし葛城山のこと也後には音にニシヤウの

峰とよぶ源平盛衰記〈廿八の卷〉役行者事の条に二上

ノ嶽と書てニジヤウノタケとよみその外もの

にこれかれ見ゆ黃葉流は紅葉の散をいふ咄

摩は和名抄〈六の卷〉大和國葛下郡の郷名に當麻〈多以來〉

云々用明記〈古事記下〉に天皇娶當麻之倉首比呂之女

飯女之子一生御子當麻王云々用明記〈日本紀廿一〉に元

年云々葛城直磐村女廣生子一男一女一麻呂子

皇子此當麻公之先也云々天武紀下〈日本紀廿九〉に十一五八ウ

三年云々當麻公賜姓真人云々新撰姓氏錄〈二の卷〉

に當麻真人云々垂仁紀〈日本紀六〉に七年云々當麻邑

有勇悍士一日當麻蹶速云々天武紀〈日本紀廿八〉に到當

麻衢云々神名式上〈延喜式九〉に大和國葛下郡當麻都

比古社二座當麻山口神社云々三代實錄〈二の卷〉に

奉^ル授^ニ大和國從五位下當麻山口神正五位下^一また

〈三の卷〉遣^テ使^ヲ諸社^ニ奉^ル神寶幣帛^ヲ云々從五位下守圖書

頭當麻真人清雄為^ス當麻社使^ト云々今昔物語〈旧本十一

の卷第卅一語〉に大和ノ國葛木ノ下ノ郡ノ當麻ノ郷云

云拾芥抄〈下本卷〉諸寺部に當麻大和^也右大臣豐成公^一五九才

始^ム本願曼陀羅云々本居氏〈宣長〉曰〈古事記傳卅八〉當麻路は

河内の石川郡より大和の葛下の郡へ出る山路

にして二上山の南に在て今の世に竹内越とい

ふ是なり云々此外所見おほかれとさまてはこ

ちたければ引出^ズ

第十六さいでしまく入道

○源平盛衰記〈卅三の卷〉落書に^レ赤さいで白たなごひ

にとりかへてかしらにしまく小入道^{コラダウ}これ記文^ニ

云^フ平家西国へ落下^チ給^リ後ハ世ノ騷^{サワキ}ニ引^レテ資

財雜具東西ニ運^ビ隱^シ京白川ニモテ吟^ニケレハ^一五九ウ

引^ヒ失^ス者^モ多^ク深^キ井ノ中ニ入^レ穴ヲ掘^テ埋^メナ

ドセシカバ打^キ破^ク朽^ク損^ジテ失^シバカリ也サスガ

殘物モ有^シゾカシ木曾五万余騎ヲ引^シテ上

洛シテ武士京中ニ充^テ滿^クテ家々ニ乱^レ入門^ニハ白

旗ヲ打^タ立^タテ家主^ヲ追^ツ出^スシ財寶ヲ追^ツ捕^フス云々狼

藉^不斜^殆人倫ノ所為トモ不^レ覺遙^替劣シタル源

氏也トゾ沙汰シケル何者ガ所為ニテカ有ケン
院御所法住寺殿ノ四足ノ門ニ札ニ書テ立タリ
ケリト云々與清曰赤さいでは赤き布の切にて
平氏の赤旗にたとへたる也さいでは師説へ村田春海「六〇オ
翁」に節用集へ左部」に割出布切也とあれどこれ割袴
にて左支の支を音便に以といひ多倍を約て亘
といひたる也といはれしがよし青和幣自和幣
などの亘におなじければ也袴は絹布の總名に
て細く織たるを和妙荒く織たるを荒妙といへ
りこれらのコトは別處にいふべし後撰集へ秋下」詞書
に紅葉と色こきさいでとを女のもとにつかは
して云々またへ哀傷」法皇の御ぶくなりける時に
ひいろのさいでにかきて人におくり侍ける云
云枕草紙へ春曙抄二の卷」過にし方悲しき物の段にひゞ」六〇ウ
なあそびのてうどふたあゑびぞめなどのさ
いでのおしへされてさうしのなかにありける
を見つけたる云々またへ春曙抄五の卷」なまめかしき物
の段に殿守司などの色々のさいでへ印本作さいく「水戸本作
さいて」をものいみのやうにてさいしきつけたる
などもめづらしく見ゆと云々宇治拾遺物語へ四の
卷」佐渡國に有金條に袖うつしにくろばみたる

さいでにつゝみたる物をとらせと云々またへ十三の巻、唐人の女羊ヒツジに生れたる条にうせにしむすめ

青き衣をきて白きさいでしてかしらをつゝみ」六一才と云々など物に見え大蔵卿へ行宗、集に保延五年

五月三日禁中にて縁よりおちて侍しに成通中

納言もとよりゝをさなはやなくいへのさいてら

うにしりてころもにかくときくはまことかとも

よめり此歌いとく心得がたし又小笠原光清弓

之紀岡本記などにつるさいてありこは弓の絃

輪にまく絹にて今ツルキヌといふ物なるよし

伊勢氏へ貞丈、赤鳥隨筆(マ)にいへり頭にしまくは

頭に纏カクベことにてしはしすゑしありくなどのし

におなしく為の字義也洛陽田楽記に後巻とあ

るは田樂の後に立て行人の事にて今俗に踊屋臺ヲトリヤダイの助人スゲビトなどいふ者にて

為纏シマキとはおなしからず」六一ウ

第十七うらわかみ

○萬葉集へ四の巻の大伴家持歌に、浦若見花咲難寸梅

乎殖ウツク而人之事重三念オホヒ曾吾為類此歌夫木抄へ三の巻

春部へ三にも載たり萬葉集へ卷の八の丹生女王旋頭歌

に、高圓タカカマド之秋野上乃瞿麦之花下ハナサ壮香見人之挿

頭シメ瞿麦之花同集へ十の巻の柿本人麿集歌に、夕去野邊

秋芽^{アキハ}子^コ末^マ君^{キミ} 露^{ツユ} 枯^カ金^{キネ}待^マ難^{ガタシ}こは古今六帖^{コキンロクテウ}へ第六^{ダイゴク} 雑思部

に下^{シタ}句^ク霜^{シラ}にかれかね君^{キミ}まちなかねつと有伊勢物

語^{コト}へ四十八段^{シジュウハチダン}に昔男^{ムカシヲ}いもうとのいとをかしけなるが

老^{オシロ}ひきけるを見^ミをりてうらわかみねよけに」六二才

見^ミゆる若草^{ワカクサ}の人の陸^{ツチ}ばん事をしぞ思^{オモ}ふ此^{コノ}を古

今六帖^{イマロクテウ}へ第六^{ダイゴク} 春^{ハル}の草部^{クサブ}新千載集^{ニイニヤウシウ}へ戀一^{コイイチ}などに在原業平

の題^チとせり家集^{イヘ}には見^ミえず曾根^{ソノネ}好忠^{コウチュウ}家集^{イヘ}にへお

ほあらしきの小笹^{コササ}が原^{ハラ}や夏^{ナツ}を涼^{スズシ}みはたまく葛^{カズ}は

うらわかみかも後拾遺^{コトヒクイ}へ春下^{ハルノシタ}に三月^{ミツキ}はかり野^ノの草

をよみ侍^{サマヘ}りける藤原義孝^{フジワラノヨシタカ}へ野辺^{ノノヘ}見^ミれば弥生^{ヤシキ}の

月^{ツキ}のはつるまでまたうらわかきさいたづまか

な大和物語^{オホヤマトモノリ}へ上卷^{ウヘマキ}に忠岑^{チウシン}かむすめありと聞^キてある人

なんえんといひけるをいとよき事^{コト}也といひけ

りをとこのもとよりかのたのめたまひし事^{コト}こ」六二ウ

の比^ヒのほとにとなんいへりけるかへりことにへわ

かやとの一本^{イツポン}薄^{ウス}うらわかみむすひ時にはまた

しかりけりとなんよみたりけるまことにいとち

さきむすめになん有^アける云々^{クニクニ}風雅集^{フウヤシウ}へ春上^{ハルノウヘ}崇徳院

御歌^{ミウタ}へ春^{ハル}くれは雪^{ユキ}けの沢^{サハ}に袖^{スエビ}たれてまたうら

わかきわかなをそつむ新續古今集^{ニイニヤウシウ}へ春上^{ハルノウヘ}前中納言

雅孝歌^{ヤカウカ}へもえ出て烟^{ケリ}みしかき初草^{ハツクサ}のまたうらわか

かき野邊の色かな夫木抄へ春一〳若菜部に後徳大寺
左大臣へうらわかみつめどたまらぬゑぐのは

をかたみにのみもおほせつるかな同抄へ春二〳若草一六三才
部に従二位忠定卿へ見たせは春は難波のう

らわかみあしの軒葉の浅みどりなる同抄へ春三〳春
駒部大蔵卿有家へかすみゆく難波のあしのう

らわかみ汀の駒も春をしるらし此は建保名所
百首の題也同抄へ春五〳雉部に忠度朝臣へさいたつ

ままたうらわかきみよしのゝ霞かくれにきゝ
すなく也此歌は家集または万代集(ママ)に出た

り夫木抄へ夏一〳葵部に大納言師頼卿へ日かけ山生
るあふひのうらわかみいかなる神のしるしな

るらん此は堀川百首の歌なり夫木抄へ秋五〳葛部二一六三ウ
条天皇太后宮撰津へたまさかにあふ坂山のま

くす原またうらわかしうらみはてじを同抄へ雑四〳
野部源頼綱朝臣へさいたづまうらわかゝりし

しめし野のしのゝをすゝきほに出にけり同抄
へ雑七〳浦部前中納言定家卿へ春の色は今日こそみ

つのうらわかみあしの若葉をあらふ白波此題
は建保名所百首難波津の題也新勅撰集へ恋四〳民部

卿成範へ思ひきやまたうらわかき初草の秋を

もまたでかれん物とは玉葉集〈春上〉常盤井入道前
太政大臣へ春日野にまたうらわかきさいたつ」六四才
ま妻こかるともいふ人やなき長方卿集に武
蔵野はすくろか中の下わらひまたうらわかし
紫の塵此題夫木抄〈春三〉早蕨部にも見ゆ右の題ど
もをかうがへ渡すに末君みにて草木の末葉の
若きにいふよしの舊説ども一わたりはさもと
聞ゆ歌林樸楸拾遺にウラハ末ノ詞ナリウラワ
カミ藤ノウラハナド云云契沖阿闍梨か代匠
記四の下巻にうらは上なり末なり若見は末葉
などの若きをいふ云々又云源氏に藤のうら葉
弓のうら筈と用云々谷川氏か倭訓栞〈四の巻〉の字部」六四ウ
にうらわかみ弱草ワカクサにより春の草の葉末わか
わかしきをいふ也云々また万葉〈七の巻〉詠河歌に
波祢ハネ蘊カヅラ今イマ為ナリ妹イモ乎カ浦ウラ若ワカ三ミ去イ来サ率ミ去イ河カ之ノ音ネ之ノ清サ左サ
同集〈十一の巻〉寄物陳思歌に⁵⁰波祢蘊今為妹之浦若咲
見愠見著而四劔解此歌古今六帖〈第二〉人部袖中抄
〈廿の巻〉夫木抄〈雜十〉蘊部には詞を誤て載たり同集〈十四
の巻〉未勘國譬喩歌にへ乎佐刀奈流波奈多知波奈
乎比伎余知氏乎良無登頂礼抒宇良和可美許曾
蜻蛉日記〈中巻〉にかうらんにおしかゝりてとばか

りまぼりゐたればかたきしに草の中にそよ／＼」六五才

しらしたるものあやしきこゑするをこはなに

ぞととひたれば鹿のはふなりといふなとかれ

いのこゑにはななざらんと思ふほとにさしは

なれたる谷のかたよりいとうらわかきこゑに

はるかにながめなきたなりきく心ち空也とい

へはおろか也云々続千載〈春上〉後京極摂政へ春日

の、草のはつかに雪消てまたうらわかき鶯の

こゑ櫻井基輔家集へ上巻〉に、時鳥またうらわかき

初こゑはまたさとなれぬしとぞきく為尹

千首へはつ草のまたうらわかきこえけり野」六五ウ

上のかたの鶯のこゑ拾遺愚草員外へ上巻〉に、過が

てにつめとたまらぬなつなかなうらわかくな

く鶯のこゑ右の歌詞ともによればたゞわかき

ことにいふともきこゆ契沖法師が勢語臆断へ、の、卷

に末の字にあらずたゞ若きことなるよしいひ賀

茂翁萬葉考へ十一の巻の考〉にはうらはやをら也弱にて

宇良々々と照れる春日といふも弱ら／＼の心に

てうら若みといふに均し云々與清曰うらわか

みは葉末の稚にいふとも又たゞ若きにいふと

も先達の説なれとくはしからずこは万葉八の」六六才

卷丹生、女王の旋頭歌に于壯香見と有を活字本には丁壯香見異本には下壯香見など書たりこは下壯香見と有が正しくて心をも表裏の裏をもウラといへは表はさしもあらねと下はいと若くき貞を底若さにとはいへる也されは葉末にも限らず底に若き貞を含たる物にいふ詞也けり

第十八答於屋代弘賢之問

○大あらき万葉三に大皇之命大荒城乃時余波不有跡雲隱座この荒城は荒籬の略語にて殯をい六六ウへりと云説さもあるべし同七に如是為而也尚哉將老三雪零大荒木野之小竹余不有九二兼盛集に君が代をまちしもしるし大あらきの里のさかえを見るがたのしき曾丹集に「おほあらきの小笹が原や夏を浅みはたまく葛はうらわかみかも夫木抄へ雑四に長能大あらきのとほ野の外にすむ人を見すてゆけば袖ぞつゆけきこれらは地名と聞ゆれば神名帳の大和宇智郡荒木神社ある所なるべし古今雑上に「おほあらきの杜の下草おいぬれば駒もいさめずか」六七オる人もなし後撰雑二忠岑「おほあらきの杜の

草とやなりにけんかりにだに来てとふ人のなき同躬恒へ人につくたよりだになし大あらしの杜の下なる草の身なれば拾遺夏忠岑へ大あらしの杜の下草しけりあひてふかくも夏の成にけるかな同雑春躬恒へいたつらにおいぬべく也⁵⁴あおほあらしの杜の下なる草葉ならねと六帖二に

へおほき鷹のいまとしなれば大あらしの杜の下草人もかりけり此哥貫之集三に初句おぼつかなどありこれらの下草をよみ合せたる」六七ウ

は地名にあらず大なる荒木の立る杜也曾丹集十二月中の哥にへおほ荒木のおほくの枝もなびくまで夜半にさびしき冬の夜の風万葉十一

に如是為哉猶八成牛鳴大荒木之浮田之杜之標カクシテヤナホヤナリナムオハラキノモリノシメ

余不有余といふも浮田の杜に大なる荒木立ればしかよめる也されど此万葉十一の哥は七の卷の哥の誤にても有べし曾丹集四月中の哥に

へ大あらしの下草までに風ふけばなびきて神を

まつりあへるかもと有は賀茂の社をいふにや

ともおほゆおほあらしかく三種に別れたれば」六八オ

思ひわくべし又曾丹集にへよそに見しおもあ

らの駒も草なれてなつくばかりに野は成にけ

り此哥夫木抄雜七には二の句おほあらきの駒
とありきては大荒木の木間とつゞけし序哥に
て駒といはん料に縁語もていひながしたる也
因に云右に引出し曾丹集十二月中の哥の夜半
にさひしき冬の夜の風とあるは夜と云詞二ツあ
ありて聞ぐるしなともいふべけれどさにあらず
まづ夜半と云詞賀茂翁の夜間の義といはれし
は頑也こはたゝ夜の事にも夜深の事にもいふ」六八ウ
に⁵⁵三更と書たるをへ七の卷八の卷九の卷十の卷十九の卷
ヨナカともヨクダチともよめり古今雜下に
ゝ風ふけばおきつしら浪たつた山夜半にや君が
ひとりこゆらん左注に夜ふくるまで琴をかき
ならしつゝ云々古今六帖五にゝ玉のをのた
えてみじかき夏の夜は夜半になるまでまつ人
のこぬ續千載夏寂蓮ゝほとゝぎすあり明の月
の入がて⁵⁶に山のはいつる夜半の一こゑこれら
はみな夜深の事にて曾丹の夜半にさびしきと
いへるも夜ふけにさひしきにて同義なれば妨」六九オ
なし

○ふし原しば原猿丸大夫集にゝしなかどり稻名
のふし原青山にならん時にを色はかはらん此

哥によりて思ふにふし原は木立の青葉にならぬ間をいへるにやふしつけの木も葉なき柴を水中に漬たる也さればしば原は茂葉原の義にて葉のあるにいひふし原は葉なき枝のさまをいへる也ふしは節にて葉のちりし後は木節のあらはに見ゆるよりいへるなるべし和名抄、木具部に四聲字苑云節草木擁腫処也和名布之今「六九ウ按従^レ竹者竹節也従^レ草者草木節也見^ニ玉篇^一とあり神代紀に蒼柴籬といへるは生柴籬にて今の世にいふ生垣也是も葉のなきほどはふし垣と⁵⁷いひ葉あるをりは青柴垣といへりと見ゆ後世しば垣といふは葉のある枝もてかこへば也ふししばといふも葉のなき柴なるをしば⁵⁸をそへて

重言しにや尚可考

○とわたるとわたるといふ詞は門渡るにいへると飛渡るとたゞ渡ることにいへるとの三義あり

古今雜上に「わかうへに露ぞおくなる天の川」七〇オとわたる舟のかいのしづくか此哥伊勢物語にも見ゆこは川門を渡るよし也新勅撰雜二前関白「河浪をいかゞはからん舟人のとわたる梶の音はたえねど是もおなし飛渡るよしによめ

るは相如家集に(ママ) かげろふの水にとわたる螢
よりもはかなくみしは夢かうつゝか拾遺愚草、
中にゝはまびさしなけのかたみか友千鳥とわ
たり過る沖の小島に同下に(ママ) 59 あまつ風初雪し
ろしかさゝぎのとわたる橋の有明の空月清集、
下にゝをちかたの浦人今やねさめしてとわた」七〇ウ

る千鳥近く鳴くらん續後拾遺冬照慶門院、一条
ゝさえまさるさほの河原の月影にとわたる千
鳥聲ぞふけぬるこれら也又鳴わたることのみに
いへるも有されど渡の誤なるべし壬二集、中に
ゝ住吉の松やつれなき夕しくれとわたりかへ
る淡路しま山續古今秋上為家ゝ見るまゝに秋
風さむし天の原とわたる月の夜ぞふけにける
玉葉雜二万里小路前右大臣ゝ沖つ風更行空に
あかしがたとわたる月の影のさやけさこの外
にもおほかれどわつらはしければ引出ず」七一オ

○⁶⁰けこのみわもり散木集にゝ⁶¹ななれつるけこの
みわもりかずそひてさや田の早苗とりもやら
れず按にななれつるは酒宴の席にてサカツキ 盃の廻流
るゝ貞也サマけこのみわもりは食籠ケの酒盛ミヅモリにてけ
ご⁶²はもと強飯コハを筥ハコにもりたるを後に比女飯メイトも

る椀の名にもいひ及ぼせる也伊勢物語にけご
のうつはもの⁶³と有みわ⁶⁴は酒をいへり飯椀に酒
を盛れるをあまた呑酔たる貞也さや田は遠江
國佐益郡の田也こは田夫か酒宴の席にて飯椀
にてあまた酒を呑多ひ苗もとられぬまでにな⁷¹七
一ウ
れるよし也

第十九答於盤瀬醒之問

○足袋と宗五大草子上卷に足袋の事殿中へ

は御免候はではえはき候はず候御免の時は必
御足袋を一足被下候又入道同朋は御免の沙汰
なくはき候人の内衆も主人の御免候へばはか
れ候いかさま無紋の皮ふすべ皮をば不^レ可^レ用出

陳の時はふすべ皮たるべし云と和名抄履襪部

に覃皮履唐令云諸鳥履並^ニ烏色烏^ハ重皮底履^也覃皮

庭云と和名与^レ履同今按野人以^ニ鹿皮^一為^レ半靴一名曰^ニ三七二オ

多鼻^一宜^ク用^ニ此^一覃皮^ニ字^一乎云と重之集上に春くら

うどたびといふくつ⁶⁶を花につけて得させたる

あし引の山の櫻も見にゆかじこのたびえたる

くつのをしさにたと見え⁶⁷中山傳信録日本風土

記などにも載たり古は皮足袋のみなりしに寛

永の比より草綿天下に遍くなりて草綿足袋の

製おこりきて苧^ワざし木綿^{モメン}ざしは四谷^{ヨツヤ}にて製^{ツク}る
を四谷指^{ヨツヤザシ}と称し苧指^{ワザシ}は⁶⁸傾城窪指^{ケイセイクボザシ}とも又は鷹匠^{タカシヤウ}
足袋^{タダ}とも称して賞観^{モテハヤ}せり又甲掛足袋^{カフカケタビ}といふも
あり此三種^{キヌ}をすべて用ふみな近世の製作也

○金打^{キンチヤウ}の誓言^{セイゴン}俗に誓^{チカ}を立る時にキンチャウとて
男子は刀劍などを打合せ女子は鏡などを打合
するはもと或は猪^{イノ}を斬て若違^{ワカチ}変せば此猪の如
からんといひ或は刀を折^{オリ}矢を折て変約せば我
身もかゝらんと誓ひ女子は鏡を破^ワてたとへに
せしを真言家⁶⁹に金丁^{キンチヤウ}の法とて守覚法親王の左
記にくはしく記されし事あるにとり合せてキ
ンチャウとは呼^{ヨベ}る也金打と書べきを省^{ハブキ}て金丁
と書は⁷⁰古實也とぞ一七三才

○馬鹿者^{バカモノ}々々といふ語太平記(十六)本間孫四郎遠
矢の条に如何ナル推参ノ馬鹿者ニカアリケン
云々同書(廿三)土岐頼遠参^リ合御幸^ニ致^ス狼藉^ヲ一条に如何
ナル馬鹿者ゾ一々ニ奴原臺目負^ハセテクレヨト
匍^{ムシ}リ云々など見え節用集にも載て破家^{バカ}とも書
たるはいづれも借字也こを馬鹿の字に泥^{ナツ}て趙^{シヤウ}
高が故事に引あてし説はいみじきひがこと也馬

鹿は煩計ワザの通音にて源氏明石へ湖月抄四十三丁オへに入道
が事をいへるにいとゞぼけられてひるは日ひ
とりいをのみねくだしナ夜はすくよかにおきぬ」七三ウ
てづのゆくへもしらずなりにけりと手をお
しすりてあふぎあたりとあり此外物語書にば
けくなども書たる挙るに違イトなし

○天守城の天守は近江安土城に起れるよしいへ
るはひが事也細川両家記上卷に摂津國伊丹城
の天守にて腹切し事見え勢州四家記にも出て
安土城よりもはやくありし製也

○繪馬本朝文粹十三の卷大江匡衡ノ北野天神ニ供ル御
弊并種々物ヲ一文に色紙繪馬三足云々此文朝野群

載二の卷にも載ず法華驗記下卷紀伊國美奈倍ノ七四オ

道祖神の条に沙門恠念巡リ見ル樹下ニ有リ道祖神像ノ朽ク

故ヲ逕ニ多ク年ヲ歳ヲ雖モ有リ男ノ形ニ無ク有リ女ノ形ニ前ニ有リ板ノ繪馬ニ前ニ足

破損沙門見テ了リ繪馬足損ニ以テ糸綴補置ニ本所ニ畢ス云々

舊本今昔物語語十三の卷第卅四語に道祖神ノ形

ヲ造リタル有リ其形旧ク朽クテ多ノ年ヲ経タリト

見ユ男ノ形ノミ有テ女ノ形ハ无シ前ニ板ニ書

タル繪馬有リ足ノ所破レタリ道公是ヲ見テ夜

ルハ此道祖ノ去ケル也ケリト思フニ弥ヨ奇異

二思テ其繪馬ノ足ノ所ノ破タルヲ糸ヲ以テ綴
テ本ノ如ク置ツト云々此説元亨釋書九の卷道」七四ウ
公傳にも見ゆ宣胤卿記、永正十七年十一月九日
の条に明日多武峰社遷宮、閔白御使衛門佐へ十才、宣
綱云々宣秀相伴下繪馬二枚進云々など所見枚
挙しかたし続日本紀神護景雲三年二月乙卯の
条に伊勢太神宮の馬形見え雄略九年紀新撰姓
氏録左京皇別下日本紀竟宴歌などに誉田陵の
土馬もありて生馬の代に土馬木馬繪馬とな
りし⁷²ことといはやくよりのわざ也太平記廿九阿
保秋山河原軍の条に其靈仏靈社ノ御手向扇
團扇ノバサラ繪ニモ阿保秋山が河原軍トテ書」七五オ
セヌ人ハナシ云々といへる靈社の御手向も繪
馬の事にてそは必馬に限らず他形の繪を書いて
奉れるをも繪馬とはよべる也神社啓蒙或問南
嶺遺稿一の巻草盧漫筆神道名目類聚抄倭訓栞
などにも繪馬の事あり南嶺遺稿に園記といふ
ものを引て建曆年中伊豆の三島の社へ八幡太
郎陸奥軍の圖ありといへるはうけがたし園記
といふは桂秋齋か例の偽造の書名なるべしか
ら書にも唐鄭還が古傳異に王昌齡馬當山謁^ス廟

乃命^{シテ}使^シ賚^ニ酒脯紙馬^一獻^ス于大王^ニまた丹鉛録に呉^泰七五ウ
伯^祠在^リ閩^門之東^ニ每^ニ春秋^一市人相率^テ牲^ヲ禮^ス多^シ善馬^一採^ニ
輿^{シテ}美女^一以^テ獻^ス之^ヲなど有

○六十六部回國の經聖新撰和漢合圖承平二年の

段に頼朝房納^ム法花^ヲ於^テ大社^ニ六十六部始^ル也云^ク桂川
地蔵記上卷に或有^リ六十六部回國之經聖負^{ヘル}笈^云

云奇異雜談集一の卷人の面に目鼻なくして口

頂の上においてものをくふ事の条に津の國の

聖道一人へ名藤坊へ九世戸さんけいのついでに予が

居所にきたりて数日逗留の時かたりていはく

津の國に一人の聖道あり日本六十六ヶ國を修^ル七六才

行するに國ごとに十月廿日逗留してその國中の

名所旧跡大社験佛残りなく一覽をとげてかへ

る也云^ク妙法寺記に彌勒二年丁卯云^ク六十六

部ノ写經供養云^クなど見え塩尻五の巻にも六

十六部廻國順礼の事あり尚可考

○木から落た猿俗語に便なくなりたるを木から

落た猿のやうといふは源平盛衰記廿四の卷へ十一

丁ウへに木ヲ離レタル猿ノ迎ヤ儲セヨトテ云^ク文

選西都賦に猿狢失^ル木云^クなどあるにおとれり

と見ゆ^ル七六ウ

第二十答椿仲輔之問

○比滿沙伎理梁天武紀四年四月庚寅詔に四月朔

以後九月三十日以前莫置比滿沙伎理梁とある

は三代實錄類聚三代格などに載たる元慶六年

六月三日の官符に毒流を禁られしにおなしく

河中小の魚虫ことく死せん事を憐玉ひての

わざ也比滿を水戸本の書紀また釋日本紀など

には比彌に作りたれど通音なればいつれにて

もすべし谷川土清が通證に比滿沙伎理者遮隙

之義也荀子註石絶水為梁所以取魚也搜神後記七七オ

所謂蟹断亦此意唐書咸亨中禁作簞捕魚といへ

るにて其義知べし隙もらさじと魚を遮留る梁

を制られし也今河湖中に立て魚海苔など取料

の竹木をヒゞといふも比滿比弥の名に据れる

にや曾丹集にえりさすとよみたるを言塵集ひ

び木のよし注したり

○都婆波山都婆波小都婆延喜式日時祭式造酒

式などに都婆波山都婆波小都婆波あり都婆波

は空瓮にてウツボペ⁷⁴のウ⁷⁵ヲ省きホとへを⁷⁶に

通はしたる語とおほゆそは瓮都婆波「短女杯」七七ウ

蓋など並挙たるにても知べし其形今は知へか

らねど清濁酒を納もし煖もする器と見ゆ盆は
いと深からぬにいひ都婆波は深く殊に中の空
なるにいひ匱は柄有物にいへるにや短女杯と
77 盞とは酒を酌器也さて山都婆波とある山は
大の字の誤にて大都婆波なるべしそは小都婆
波に對たる名なれば也儀式には參河國の産物
のよし見ゆ

○等呂須伎延喜、大嘗會式造酒式などに等呂須岐

見え儀式に參河國、等呂須伎〈造酒式にも參河國所造等呂須岐とあり〉七八才

りあり匡房卿記、天仁元年記にも造酒司所、供等

呂須岐見えて酒五升納器也名義⁷⁸和名抄に參河

國設樂郡設樂、和名之多良とあればシタラ杯ノ

シ⁷⁹を省きたラ⁸⁰をトロ⁸¹と通はしいへりと見ゆ今

參遠兩國の境志等呂といふ處〈今の荒井の邊〉にて造る

焼物をシトロ焼⁸²といふも等呂須伎の遺風なる

べし

○下総國豐田郡和名抄に下総國管十一葛鏝〈加止志加〉

千葉〈知波〉印幡匝瑳海上〈宇奈加美〉香取〈加止里〉埴⁸³生〈波尔布〉相

馬〈佐宇万〉猿島〈佐之万〉結城〈由不岐〉豐田〈止与太〉とあり民部「七八ウ

式、上またおなし頭書に延喜四年十二月十日改^二

岡田郡「為^三豐田郡」と見ゆ神名式、上に下総國岡田

郡桑原神社といへるは改ざる已前の名をしる
せし也拾芥抄下総国十一郡とて豊田郡の下に
元岡田延喜廿年改_レ豊田_トとしるし別に千田郡を
加_レたり十一は十二の誤千田は岡田の誤なるべ
くおもふよしは古本節用集に大管十二郡とし
岡田を加_レたれば也されば上古岡田郡といひし
を延喜年中へ延喜式頭⁸⁴には四年とし拾芥抄には廿年とす_レ豊田に改め
鎌倉の末室町の始などに二郡に分て十二郡と_レ七九才
せられし来べしまた吾妻鏡によれば葛鋸郡を
分_{ワケ}て葛西葛東とせられし事もありと見ゆ

第廿一くがにあげれるいを

○阿佛尼十六夜日記長歌に_レ須磨と明石のつゞ
きなるほそ川山の谷川にわづかにいのちかけ
ひとてつたひし水のみなかみもせきとめられ
ていまはたゞくがにあげれるいのごとかちを
たえたる舟に_レてよる方もなくわびはつる子
を思ふとてよるのつるなく_レ都出しかど云_と⁸⁵
陸にあがれる魚とは金光明最勝王経へ卷第十捨身_」七九ウ
品に大車王の第三子摩訶薩埵太子大慈悲心を
起し身を大竹林の餓虎に投與し時其母国太夫
人悲傷の事を説_レる条に爾時夫人迷問稍止_」頭髮

蓬乱^シ両手^モ槌^モ 宵宛^ヲ轉^シテ 于地^ニ如^ク 魚處^ル 陸^ニ 若^{カク} 如^ク 生^シテ 失^フ 子^ヲ 悲泣^ス
而言^イ云^{ハク}と見えたる故事によれるなるべしま
た莊子^ノ外物篇^ニ有^リ中道^ニ 而呼者^一 周顧視^{スレハ} 車轍^中有^リ
鮒魚^一焉 周問^レ之曰 鮒魚^来 子何為^{スル}者 耶 對曰 我東海^ノ
之波臣^也 也 君豈有^ニ斗升之水^一 而活^{サシヤ} 我哉 周曰 諾 我且^ッ
南^ノ遊^ニ 吳越⁸⁶之王^一 激^シ西江之水^ヲ 而迎^レ 子可^{ナラン} 乎 鮒魚^{忿然} 作^シ
色^ヲ曰 吾得^ニ斗升之水^一 然^{シテ} 活^シ 耳 君乃言^レ 此會^不 如^ニ 早索^ニ 一 八〇オ
我^於 枯魚^之 肆^ニ 云^々 とも見ゆ

第廿二歌道の養子

○兼載雜談に俊成卿の嫡子に兵部卿家長といふ人ありしかど無器用なるにより寂蓮を歌道の養子にせられし也その後定家といふ子出来て後寂蓮は斟酌せしなり寂蓮は俗名中務少輔定長といへりとあり養子は神代紀上に天照大神の素戔嗚尊の御子を養玉ひしを始にて続日本紀二の卷假寧令義鮮などに見え續世継八重のしほぢの卷にはやしなひ子とあり後漢書順帝「八〇ウ紀五代史唐太祖家人傳その外から書の所見もおほかり

第廿三つくり丘

○和泉国内神名帳に大島郡從四位上造^{ツツクリ}岳社^{ツツクリ}前あ

り按に造^{ツク}岳^{ツク}はもと作^{ツクリ}道^{ミチ}築^{ツキ}山^{ヤマ}などの意にて新に造りし丘の後に地名になりしものなるべし

第廿四野井

○神名帳に石見國安濃郡野井神社あり野井は野原の中なる井のことなるべし武蔵野の井頭の池相模野の大沼などの類掘^{ホリ}たる井に限らず池「八一才沼の類にても野中なるは野井といふべし野中の清水などおなし心也

第廿五哉の字

○世になま古學者だつ人かなに哉の字をかくをいみじきあやまりとおもひたるはわらふにたへぬこと也萬葉七に君為浮沼池⁸⁷菱採我染袖沽在哉^{カモ}同十一に公目見^{キミガタマミマクホリシヲ}欲^{キコメタマフコノフタヨ}是^{チトセムゴトモワカコケルカモ}二夜千歲如吾戀哉^{ユゲトモクノスエヒサカケアムツクシモニケルカモ}また行々不相妹故久方天露霜沽在哉^{ユゲトモクノスエヒサカケアムツクシモニケルカモ}などの加毛は後の加奈におなじ又顯宗紀に美飲喫哉此^{ニハ}云^ニ于^ウ魔羅你^{マラニ}鳥野羅^{トノノ}屢^ル柯^カ俊^トとある柯俊も通音にて「八一ウ加奈におなじければこれらによりて哉の字かかんことくるしからずと知べし

第廿六壽の假名

○須の假名に壽の字をかくは十王經に樹有^{キニ}荊棘^{リオドロ}宛如^{モシ}三鋒^シ刃^ニ二鳥栖^{スツカサドル}掌^{ラケ}一名^ニ無常鳥^{ムジョウトリ}二名^ニ拔目鳥^{ハクメトリ}我^レ汝^{ハカ}

舊里^ニ化^{シテ}成^ラ二鷗鷯^ト示^シ怪^ヲ語^ニ鳴^ク別^{ホト}都^ト頤^キ宜^キ壽^トへ此鳥近^ニ吳語^ニ云^ニ祈^ニ家^ニ命^ト鳴^ク
我汝舊里^ニ化^{シテ}成^ラ二鳥^ト鳥^ト示^シ怪^ヲ語^ニ鳴^ク阿^ヲ和^ヲ薩^ヲ加^{カト}へ此鳥遠^ニ吳語^ニ病^ニ來^{レハ}將^ニ
命^ト尽^レとあるをより所とす無常鳥は杜^{ホト}鷗^{キス}拔^キ目^ト鳥^トは
鳥^{カラス}なり此経は圓融一條などの御代に偽作せし
物にて安然和尚の抄物へ題昭袖中抄⁸⁸日蓮坊の十王讚⁸⁸八二才
歎抄曆應の比⁸⁹暮露々々草子源氏河海抄などに
も引用たればいと古書也またうけられぬ書な
れど大同類聚方の假名にも壽^スの字をおほく書
たり

第廿七等身の佛

○等身の佛像は榮花物語更級日記舊本今昔物語
吾妻鏡などその外古書におほく見ゆこは人の
身の丈^{タケ}にひとしく佛をつくりたること々おもふ
べからず二中歴^三造佛^三歴^三寸法^三の条^三に頌^レ曰^ク丈
六尺又五三尺一揲手半周尺三佛出世^三長^ニ八尺^ト一八二ウ
是表^ニ佛尊^ニ躰^ニ相^ニ故^ニ一倍^ニ謂^フ之^ニ丈^ニ六^ト也^ニ為^ニ衆^ニ生^ニ悟^ニ無^ニ常^ト
其壽百歲五分^ニ減^ニ一分^ニ唯^ニ八十^ト也^ニへ廿^ニ為^ニ一分^ニ八尺者佛出
世時大夫等身謂^ニ之^ニ半丈^ニ丈^ニ六^ト也^ニ五尺者弘法傳^ニ漢土^{ヨリ}
時人長^也也近代謂^ニ之^ニ等身^ト三尺者釈尊^ニ為^ニ瞿^ニ師^ニ羅^ニ長^ト
者^所現^ル身^也也一尺六寸者准^ニ丈^ニ六^ト也^ニ一揲者從^ニ母^ニ肘^ト
節^ニ異^ニ予^ニ其腕^ニ節^ニ也手半者其手之半分量^也也所謂人

在^ル母胎^ニ時^至于^ニ第廿七箇^ノ之七日^ニ一人相皆備^ル以^テ手掩^ヒ
面^ヲ蹲^キ踞^リ而坐^ル其時身長^ニ與^ニ母一揅^ニ手滿^ニ卅八箇^ノ之七
日^ニ已^テ出生^ス也因^ニ養育^ニ故成^ニ八尺五寸身^ト云々是依^ニ東
山隱上人説^ニに粗注^ス之^レとあるに据^ヒは五尺を等身の「八三才
佛像といへる也論祇經^{下卷}金剛吉祥大成就品
に復説^フ畫像曼拏羅法^取淨^キ素氈^ニ等^ニ自身^ノ量^ニ而圖^ニ畫^ス
之^レ凡^レ一切瑜伽中像皆自身自坐^ニ等^ニ量^ニ畫^ク之^レ云々西域
記^五の卷鞞若鞞闍國の条に伽藍^{東起}寶臺^{高百}
餘尺中有^ニ金佛像^一量^ニ等^ニ王身^ニ云々など見え宗何遠
が春渚紀聞^五の卷撞^鐘畫^像作^{追薦}一条には亡者
の等身像を画^テ糊^シ事あり

第廿八更級日記

○菅原^{孝標}朝臣^女のさらしなの日記は地名のついでいとみだりなりそは女十三になるとし父「八三ウが上總介の任はてゝのほるにぐしたりしほど
のことそれよりつぎぐの事をもいと年へて後し
るした^シなればしとけなきがもとよりの體裁な
るべし中の文^ニに二三年四五年へだてたることを
しだいもなく書つゞくればやがてつゞきたち
たるすぎやうさめきたれどさにはあらず年月
へだゝれることなり云々又所々になりなどして

たれも見ゆることかたうあるにいとくらしい夜六
波羅にあなる甥のきたるにめつらしうおぼえ

て、月もいで、やみにくれたるをばすてをな」 八四才

にとて今宵たづねきつらんとぞいはれにける
云々などあるにて後にしるせし書なること又信

濃にくだりし事などもおもふべしざるを山岡

明阿弥の校本とて安田躬絃がもたる本に古本
を引て地名のついでをたゝしたるありその古

本いとうけられぬものにて明阿弥の私に考出
し説を古本にかゝりなといとあざむきしな、め

りそは逸著聞集なども此法師自つくりて古代
めきたる奥書をそへ世人をまとはかしたる例

もあればなり余が見しは元禄十七年の刊本扶」 八四ウ

桑拾葉集、本群書類従、本橋千蔭が校本余が家蔵
の古写本二種齋藤彦麿が家の寫本岸本由豆流

が家の写本清水濱臣がもたる難波人若山滋古
が古印本謄写の本など凡て九種也この中ひと

つも明阿弥の校本におなじきものなればはい
よゝゝ地名の正しきはその本の正しからざること

をしりはてぬさて更級日記といへるは題号は

いとすゑに更級にくだりしよしあれば也この

作者は右大将道綱母の姪にてぎえかしこきぞ
うなればかの蜻蛉のにきにもおさく立おとる」八五オ
ぬふみは作り出たなるべし

第廿九雞冠花

○多識編濕草類部に雞冠和名今按土利左加久左
俗稱^{スケイトケト}伊土計云^ト節用集計部草木門に雞頭花
ケイトウゲ云^ト節用集大全計集草木門に雞頭
花雞冠花也^也有^ト掃帚扇面瓔珞等^ト皆以^ト其花形^ト名^ト之
也云^ト大和本草卷七^ト廿五丁オ^ト花草類部に雞冠花々
紅白黃三色アリ品多シ鮮紅ニシテ大ニ重ナル者
上品ナリ錦雞頭ト云南京ノ種尤ヨシ好種ヲマ
キテモ變シテ醜クナルアリシゲクウエテ花初テ^ト八五ウ
開ク時アシキヲハ早ク拔去テ好花ヲ養フベシ
三四月根ヨリ苗ヲ生ス六月ヨリ花サキ霜後ニ
萎ム凡五箇月ノ間シボマス百日紅山茶花海紅
ナド花久シクアリトイヘドモ花落テカハル^トサ
キツバク事久シキ也一花ノ如此久シキニ堪ル
事雞冠花ニシクハナシ其葉嫩キ時可^ト食性アシ
カラズ草花譜曰有^ト紫白同帶者^ト一名^ト二色雞冠^ト實ヲ
マキテ遅ク生スルハ花ヨシ云^ト本草啓蒙十一
の卷濕草類上^ト廿三丁オ^トに雞冠ケイトウ一名洗手花

〈群芳譜〉杜若〈葯圃同春〉一朵雲〈間情偶寄〉紫冠〈蘇氏韻輯〉波羅奢〈秘傳花鏡〉八六才
俗ニケイトウト呼ブ雞頭ノ意ナルベシ然トモ此

花ハ雞ノ冠ニ似タリ雞頭ニハ似ズ唐山ニハオ

ニバスノ實ヲ雞頭ト云雞冠ニ數種アリ一種莖

短ク僅ニ五寸⁹⁰ニシテ大ナル花ヲ開テ高麗ゲイト

ウ又南京ゲイトウチヤボケイトウト云漢名壽

星雞冠〈群芳譜〉廣東雞冠〈同上〉一種花ノ形圖ニシテ末尖

レルヲヤリゲイトウ又スギナリケイトウト云

漢名掃雞冠〈花史左編〉一種花ノ形チ扁大ナルヲイサ

カゲイトウ又ヒラゲイトウト云漢名扇面雞冠

〈群芳譜〉此外ニモ種類甚多シ一種掃帚雞冠ノ形ニ八六ウ

シテ花ノ末及傍ニ細枝ヲ出シ其梢各小扇面ノ如

ナルモノ出テ多ク下垂スルヲミダレゲイトウ

又イヤウラクケイトウト云漢名瓔珞雞冠〈群芳譜〉

一種紅黃二色間リ開クモノヲサキワケゲイト

ウト云漢名二色雞冠〈花史左編〉二喬雞冠〈同上〉唐山ニハ

五色相間ルモノアリ五色雲〈間情偶寄〉トイフ云々滑

稽雜談十六の卷八月下に雞冠花春種をまく時

器に入て其器の形に花形を發すといふ未考云

云汝南圃史十の卷に雞冠花佛書名波羅奢花形

高三五尺葉似篋而尖亦可食其花扁而舒長狀類」八七才

雞冠有紫白淡紅三色亦有紅白間者就中又有如
纓珞者各種形狀不一浣花雜志云清明下_レ子撒過_テ
即用_レ糞澆_可免_ニ雀啄_一子細黑藏於花中瑣碎錄云種
雞冠子立撒則株高坐撒則株低盛扇撒之則如團
扇散鬚徹之則成纓珞如欲雙色各被半邊紙麻縛
之然屢試不驗又有矮雞冠種有金陵來栽置階下
若侏儒然一名壽星雞冠此花秋_ニ興_ニ雁來紅十樣_一錦爭
_レ奇競_レ秀極為圃中點綴唯白雞冠子主治婦人淋症
最驗云_ニ祕傳花鏡五の卷に雞冠花一名波羅奢
隋在皆有三月生苗高者五六尺其矮種只三寸長_一八七ウ
而花可大如盤有紅紫黃白豆綠五色又有妃央二
色者又紫白粉紅三色者皆宛如雞冠之狀扇面者
惟梢間一花最大層々卷出可愛若掃帚雞冠宜高
而多頭又若瓔珞花光小而雜亂如筓又有壽星雞
冠以矮為貴者雞冠似花非花開最耐久經霜始薦
俱収子種撒下則糞澆可免蟲食云_ニ食物本草十
八濕草類_二本草綱目十五_一卅九丁才_レ濕草類上廣群芳
譜五十二の卷花譜などに見え詩賦などもおほ
かりまた海菜に雞冠菜あり和名抄十七海菜部
に楊氏漢語抄云雞冠菜_ハ土里佐加乃里式文用_ニ鳥_一八八オ
坂苔_ニ云_ニ類聚名義抄にもトリサカノリと見ゆ

以呂波字類抄二の卷止部植物の条に雞冠菜ト

サカノリ俗用^ニ鳥坂苔^一云々節用集止部に雞冠海

藻トツカサ云々宜禁本草追加にトツサカ又ム

カデノリ云々和歌食物本草上へ十三丁ウ止部にとつ

さかとよめる歌三首あり大倭本草八へ四十一丁ウ雞

冠菜和品^ハ順和名抄^ニ出タリ其形雞冠ノ如シ食フ

ベシ紅色也附^テ石生^ニ云々與清日雞冠花は多識編

にトリサカグサともケイトゲともいふよし見

えこれ今のケイトウ花也雞冠菜は海菜にて今八八ウ

唐船交易の品也伊豆海邊におほしこれトリサ

カノリともトサカノリともトツサカともいへ

り其主治禁忌は和歌食物本草によみたれば聞

て知べし雞冠花は唐の羅鄴が詩に一枝濃艶對^ニ

秋光^一露滴風搖向^ニ砌旁^一曉景乍看何處似^{カタル}謝家新染^ニ

紫羅囊などよりして宋元明人の詩おほかり貞

和集九の卷へ卅一丁ウ草木部に真浄が矮雞冠の詩あ

り矮雞冠は今俗ナンキンケイトウとよふこれ

也又五祖及^ヒ率菴^ヒが雞冠花の詩あり⁹²俳諧糸衣の

発句にけいとうの花のさかりや八九月余が^一八九才

雞冠花の歌君か代の秋にほひて行末も長

鳴鳥のとさか花かな⁹³谷中⁹⁴隨時苑の圃中にうゑ

たるにいとよく生しけり花もこよなくて八九

月の⁹⁵奇観也⁹⁶菜花⁹⁷苗實共に食て美味也⁹⁸牡丹芍薬

にもまさりて花寿の久きと艷色の深きとは世

に似るものなし私に花公⁹⁹と名づけたるは¹⁰⁰花王

に對し此君十八公などの称をも¹⁰¹おもひよりて

の¹⁰²わび也¹⁰³

第三十いし〜

○北山殿行幸記へ八丁オへに常の御所夜のおとゞの御」八九ウ

衣いし〜の御まうけもいかめしき事どもきこ

えしかどもそれまではのぞきもまゐらせねば

云々又へ十二丁ウへ次に¹⁰⁴関白いし〜公卿しだいにちや

くざす云々又へ十五丁オへそのうち関白いし〜次第に

まかで玉ふ云々又へ十九丁オへ御まうけの事ども御ま

しいし〜とけいめいし給ふ云々思ひのまゝの

日記へ十一丁オへに近比まゐらぬしよしいし〜までも

ととのへさせ玉ふ云々雲井の春へ八丁ウへにいし〜

の人〜云々又へ十一丁ウへいし〜けんぞうの座にまゐ

り玉ふ云々御湯殿上記へ永禄五、五、十六の条へ今日は御祈」九〇オ

禱どもあり女中の御なかへ御さかづきまゐり

てみな〜¹⁰⁵御いし〜と御いはひあり云々按にい

し〜は以次々々の字音也西宮記正月部下五日

叙位議の条の裏書に四條大納言説云著議所一時

一 大臣入_ル自_レ南_ニ以_テ次_ニ大臣以下入_ル自_レ良角_ニ但雖_ニ以_テ次_ニ

大臣_ト執筆_ノ之時_ヲ可_レ入_ル自_レ南_ニ而_テ納言執筆_ノ之時_ヲ猶_ニ可_レ入_ル

自_レ良云_ニ又著_ク御前圓座_ニ之時_ヲ以_テ次_ニ大臣執筆_者猶

先著_ク自_レ座_ニ之後_ニ隨_テ御氣色_ニ可_レ著_ク上座_ニ坎云_ニ二水記

大永_ニ正_ニ淵醉_ノの条_ニ下_ニ藤_ノ貫_者勸_盃事_云ニ第

一 大臣_ノ之外_ニ取_ル酌_人無_レ之_坎已_シ次_ニ之_坎大臣_ハ只_ハ盃_ヲ許_カ坎_ニ九〇ウ

云_ニなどあるをかうがへ合せて知べし

(以下白紙) 九一才

1も 「津島天王社 南朝系圖」の順。

2も 「月草 韓藍

紅花 押赤草」挿入。

3も 「著」。

4も 「龍」。

5も 「水まき雲」。

6も 「豊」。

7も 「農云」。

8も 「義」。

9 底本「有」、もにナシ。

10も 「韓娥」。

11も 「云木也」。

- 12 も「メタル」。
- 13 も「手向種坎」
- 14 も「松浦肥州」。
- 15 も「異本義経記」。
- 16 も「庄野出村」。
- 17 も「若宮八幡」。
- 18 も「くる」。
- 19 も「佛足」。
- 20 底本に朱で「わ脱カ」と傍書。
- 21 も「頼なし」。
- 22 底本「称」をミセケチにして下に同字を記す。
- 23 も「大覚寺」。
- 24 も「無文元選」。
- 25 も「後歴元中」。
- 26 も「法任」。
- 27 も「元九」。
- 28 も「二廿三」。
- 29 底本、朱で「醍醐」と傍書。
- 30 も「宰」に右肩二点なし。
- 31 も「宰」に右肩二点なし。
- 32 も「し」ナシ。
- 33 も「の」ナシ。
- 34 も「非三木」。

- 35 底本、右に「均カ」と朱書。
- 36 も「とかめり」。
- 37 底本、「の」を書いて朱でミセケチとする。
- 38 も「なかるれ」。
- 39 も「わとはは」。
- 40 も「よしか」。
- 41 底本、「お」をミセケチとして「な」と傍書。
- 42 も「長洲村」。
- 43 も「たゞ」。
- 44 も「数種」。
- 45 も「いふ」。
- 46 も「さて當麻」。
- 47 も「大坂」。
- 48 も「則」挿入。
- 49 も「男」。
- 50 も「ゝ」あり。
- 51 も「ゝ」ナシ。空格あり。
- 52 も「又弘仁九年三月十日の^大国^卿沽券
に大荒木^臣淨川ありこは近江國^{愛智郡}大
国^卿の沽券なれば近江にも大荒木といふ地名
ありし也」。
- 53 も「すさめず」。
- 54 も「べら也」。

- 55 も「万葉に」。
- 56 も「入がた」。
- 57 底本「と」をミセケチにして訂正する。
- 58 も「しば」に右枠線を付す。
- 59 も「ゝ」あり。
- 60 も「○」ナシ。
- 61 も「ゝ」ナシ。空格。
- 62 も「けこ」に傍枠線。
- 63 も「けごのうつはもの」に傍枠線。
- 64 も「みわ」に傍枠線。
- 65 底本「庭」をミセケチにして左に「底カ」と朱書。
- 66 も「たびといふくつ」に傍枠線。
- 67 も「二判問答」
- 〈群書類従四百七十二卷廿二丁右〉に白足袋事於_レ廷尉_レ者
 勿論也北面已下諸侍者可_レ淺黄_レ坎依_レ
 入_レ可_レ用哉如何可_レ依_レ流例_レ且又可_レ在_レ其_レ
 人所存に坎云々など見え。
- 68 も「傾城_{ケイセイ}か窪_{クボ}にて製るを」。
- 69 底本「家」の右に朱書で「宗カ」と記す。
- 70 も「密宗の省字にて醍醐を西西室生
 六一菩薩をササなどかくたぐひ也尔雅
 积詰に丁は當也とあれば金と金を
 打當る義ともいふべけれどさにはあら

でなほ打の省字なるべし」

71 も「ねくらし」。

72 も「なと奉りし」。

73 も「四時祭式」。

74 も「ウツボペ」に傍枠線。

75 も「ウ」に傍枠線。

76 も「ホ」、「へ」、「ハ」に傍枠線。

77 底本、ここに「と」をミセケチ。

78 も「名義は」。

79 も「シ」に枠傍線。

80 も「タラ」に枠傍線。

81 も「トロ」に傍枠線。

82 も「シトロ焼」に傍枠線。

83 も「埴」の字の土偏を虫食いの臨模とする。底本でははつきり土偏が書かれる。

84 も「頭書」。

85 も「源平盛衰記（四十八卷一丁左）女院吉田住

居の条にも魚の陸に上ルカ如シ鳥ノ子ノ巢ヲ

離レタルヨリモ猶悲クと見ゆ」

86 底本「越」の字補入。

87 底本、フリガナの「ケケノ」のはじめの「ケ」を朱書で「イ」に訂正する。

88 もでは割注ではなく本行で記す。

89 も「比の」。

90 も「三五寸」。

91 も「秋深」。

92 も「翰林五鳳集十九卷
にも瑞戸驢雪などが雞冠花の詩を載す」。

93 も「鳥のとりさかの花」。

94 も「こは和名抄に鶏冠菜を土里佐加乃里
と訓じ或文に用鳥坂苔とも見え同書、
羽族體部に朱冠師説冠訓佐加ともあ
ればこれかれ通はして登里左加の花
とはよめる也」とせ別業の隨時苑」とあり。「谷中」の語はも本になし。

95 も「月のほとこの」。

96 も「也ぎ」。

97 底本「菜花」をも「花葉」とする。

98 も「赤色の物は赤帶下を治し白色の物は白帶下を治して藥効あり」追加。

99 も「花侯」。

100 も「名づけて賞翫せるは」。

101 底本「此君十八公などの称をも」も本になし。

も「牡丹を花王芍薬を花相蓮を花君子梅
を花夫人などいふにむかへて」とあり。

102 も「おもひよれる」。

103 も「万葉集十一卷(四十一丁左)寄物陳思歌に隱庭戀而死軀三苑原乃鶏冠草
花乃色二出目八方古注に類聚古集云
鴨頭草又作鶏冠草云依此義者可和
月草一坎云に鶏冠草と書たるによ

ハナノイロニイデメヤモ
ツキクサ
レビ

りて契沖法師韓藍の花を雞冠花の事

とせるは然るべし本居宣長が十卷(五十五丁右)

の戀目之氣長有者三苑圃能辛藍花之

色出余来と同格なればこの鶏冠草

花もカラアキノハナと訓べし韓藍は紅花

の事なるよしいへるはいかそや紅花は万

葉集中呉藍とも紅とも書てクレナキと

訓韓藍とは殊也本草和名(下卷五十四丁右)本

草外薬部に鶏冠草和名加良阿為倭

名抄(十四卷)染色具部に揚氏漢語鈔云鴨

頭草(都岐久佐)辨色立成云(押赤草)などあるを考

るに都岐久佐は衣に摺付る草の総名に

て古代は藍紅花雞冠花鴨路草の類に

いひ中にも鴨路草をむねと月草といへ

りといひ押赤草は雞冠花は衣に押付

れは赤色の移りて染らるれば押赤草

ともいふなるべしして万葉の古注に類

聚古集を引て鴨頭草又作雞冠草と

あるは鴨頭草は總名なれば雞冠草を

然もいふよし也又依此義者可和一月草

といへるは鴨頭草を都岐久佐とよむゆ

ゑに雞冠草もしかよむへき欵と後人の

推量の説也されど月草と訓べきには

あらてなほ古點のことく加良阿為と訓
 て雞冠花の事と心得べし鴨頭草は「
 月草とも露草とも哥はよみ俗に螢草
 波奈哉良ともいふ草也漢名鴨路草に
 て本草綱目濕草部に載せ本草啓蒙、
 十二卷へ十一丁左に委くその形状を説たれば
 閱て知べし然て今世のケイトウ花古
 代は加良阿為といひ總名には月草と
 もいへり漢名は雞冠花なり余私に花
 侯と称し土里佐加乃花と哥によめる
 も古例によりてのしわざ也鶏冠菜は「
 海苔にて名は似通ひたれど別物也

「に」の字、もでは虫損臨模。

105 底本「みなく」の字配りが判然としない。もを参考に記す。

梅田 径

1984年生。日本学術振興会特別研究員PD。

単著『六条藤家歌学書の生成と伝流』（勉誠出版、2019）。

ほんこく まつのやがいしゅう まきに
翻刻 松屋外集 卷二

令和六年三月二十七日 初版第一刷

著者 おやまだともきよ うめだけい
小山田与清著、梅田径編

発行者 梅田径

〒252-0141
神奈川県相模原市緑区
相原3-22-2

kei.umeda@gmail.com

ISBN 978-4-86795-048-7

発行所：オリンピック印刷株式会社